
異世界は赤い糸!?

緋花李

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界は赤い糸!?

【Nコード】

N0343K

【作者名】

緋花李

【あらすじ】

高校生の三崎リナ（みさきりな）は、ある朝目覚めたら異世界に飛んでいた!?

異世界を歩いているとなぜかクラスメートの秋宮拓未が。
はたしてリナと拓未は元の世界に帰れるのか……

ちなみに帰れる保証はどこにもない。

本当に異世界？ 【RINA】（前書き）

新しくファンタジー小説を書いてみました。
かなり更新気ままです……

温かな目で見てやってください m () m

サブタイトルの横の名前は話の中心になっている人です。
1話目はリナちゃん視点です。
でわ、どうぞ

本当に異世界？ 【RINA】

いつも通りバスに乗って家に帰ってご飯を食べてお風呂に入ってベッドで寝たはず……なのに妙にまぶしかった。

まぶたの裏から刺した光に呻いてわたしは——三崎リナは目をあけた。そして開けた瞬間言葉を失った。

しばらくぼかんと口をあけたまま瞬きを繰り返していたけど、頭にかかったぼやが急に晴れて考えることができるようになる。

で、第一声。

「ここ……どこ？」

日本じゃないような気がする……てか、完ぺきわたしの部屋じゃないよね。この状況。

まず最初に目に飛び込んできたのは草原と一本道。後ろを見ると風車がくるくると回ってる。昨日テレビで見たお天気おねえさんは『明日の天気は雨ですから傘を——』的なことを言っていたのに空は明るく、澄み切っていて雲ひとつないじゃん。

言葉で表すなら……『ファンタジー世界』とか『異世界』とかそんなところ。……ん？ いや、そんなはずは……ここはきつと夢だ。うん。そうに違いない。そう思って笑いながら頷いてみたりする。

「夢、そうだよな。夢だ」

試しに腕を思いっきりつねってみる。

……あれ？ ちょっと待って。

「痛い……って、ええええ！！夢じゃない!？」

慌てていろんな所をつねったり叩いたりしてみたけどやっぱり……痛い。これで夢じゃないと理解完了。

そう言えば服が（パジャマだったのに！！）変わってる。

やっぱりいかにもファンタジーな服装。……うん。なんかどっかのゲームとかアニメとかで見たことあるような服。

青のキャミソール（レースがハンパなくついている）に肩が丸見えになる水色のTシャツみたいな上着。二の腕にはベルトが締まっていてそこから袖口が広い袖が付いている。色は上着と同じ。

でも、ショートパンツ（白の）というところが助かるなあ。スカートだったら正直動きづらいし……本当にファンタジーなら魔物とモンスターかいるかもしれないし……逃げるのには最適だし。

いや。モンスター魔物……？わたしは自分の考えでほぼ自爆。頭の中に嫌な

予感がよぎって、こめかみにこれまた嫌な汗が伝う。

わたしは目を伏せて胸に手を当てた。

「とりあえず……冷静に……」

思いつき深呼吸してみる。昔からの癖で焦ると深呼吸をするんだよね。意外と気持ち落ち着くんだ。

3〜4回くらい繰り返し返して落ち着かせて、今の状況を考えた。

「ここは異世界で……認めたくはないけどたぶん異世界で……異世界……」

うん。さすがに自分で言っただけはかしくなるよ。というより、なんで自分がここにいいのかわからないし。でも……

（うっわあ……バリバリファンタジー漂ってる……）

これ見たらだれでもため息と自分が異世界にいるんだということを思い知らせるはずだよ、絶対的に。わたしもさすがにここが異世界だということを認識して大きなため息をついた。

——わたしの目の前には完ぺきに魔物モンスターを使った馬車？みたいなものが通って行ったから。

その魔物モンスターを操っていた人も完ぺきにファンタジー。髪の色は緑だったような気がする。

わたしは額に手を当てて目を伏せた。わたしは、なんでここにいるのだろうか……

『……なんでここに君がいるの？』

「……？」

それは突然頭の中に直接響いてきた言葉だった。その声を聞いてわたしは顔をあげてきよろきよろと見回した。けれども、誰もいない。あるのは草原と川、そしてながれていく風だけ。

風に髪をなびかせてわたしはその声を——声の主を思い出そうと努力。その声はどこかで聞いたことのある、男の子の声。

「……もしかして——」

『……その道に沿ってまっすぐ進んで……そこに、僕がいるから……』

その声の持ち主はわたしの声を遮って道に沿って歩けと言った。歩けて……この道——以外に何もないんだけど。とりあえずわたしは声の主のところへ行くことにして、道に沿って歩き始めた。

本当に異世界？

【RINA】

(後書き)

異世界きましたね、リナちゃん。
次は拓未君ですよ。

異世界に呼ばれた僕。

【TAKUMI】（前書き）

リナより先に異世界に来ていた拓未の話です。
どうぞ!!

異世界に呼ばれた僕。

【TAKUMI】

僕は今日、電車から降りて、歩いて学校に向かったはずだ。けど、僕がたどり着いた先は学校ではなく、『異世界』だった。

「あ、目、覚めたんだね」

目を開けた瞬間飛び込んできたのは見たこともない女性の顔。…それもそうかもしれない。だってこの人の髪の色は澄んだ水色だし。しかも目の色も。

服も変わっている。茶色の七分丈のジャケットに、オレンジのちびTみたいな服、足はスキニーみたいな黒のズボンをはいていた。でも、なんていうか……模様とか、デザインが……ファンタジー……僕を体を起こしてきよろきよろとあたりを見回した。……保健室みたいな、なんか白くて小さい部屋に僕の寝ているベッドともう一つベッドがあって、僕のベッドの右側に扉があった。逆側の壁には窓があって明るい光がさしてる。

「ここ……どこ、ですか」

「あれ、覚えてないの？ 君、空から降ってきたからビックリしちゃったよ」

「……空？」

僕は記憶をたどるために右手を顎に当てた。そして考える。

たしか僕は学校に行つて——あ、学校の階段から落ちたんだっけかな……そしたらここに……？——もしかして死んだのか？

「ここ、天国……ですか？」

「え？あはは、違うよ！ここは『アクトリス』っていう町の魔法騎士を育てるために作られた学校の中なの」

「魔法……？冗談ですよね」

いきなり変なワード。この人おかしい。この世界に魔法なんてあるはずないに決まってる。この世界は古代から魔法なんて使えなかったはずだし、魔法というより科学が進歩しているんだし。

僕は女性の顔から目をそらし、部屋の窓を見た。

外では——確かになんか手とか杖とか剣……から火とか水とかなんか色々出してる。

僕は自分の目がおかしくなったのかと何度も目をこすったり、瞬きして外を見たが、やはり景色は変わらなかった。

（ここ……夢の中なの……かな。確かゲームでは魔法使えたような……）

「にしてもさあ、あなたのその、何かしら……その薄い機械すごいわよねー。文字が自動的に出るなんて……」

「それ、電子辞書……です」

女性は勝手に僕のかばんをあさったのか、僕の電子辞書を持っていた。そしてそれをきらきらとした目でなめまわすように見ている。あれ、今気がついた。服が、制服じゃない……かなりファンタジ

ーになってる。

黒のタンクトップに白の襟が高いジャケット。ズボンは長く、色は——ジャケットより少し暗い白……かな。

「……今日、何曜日ですか」

「ん？ えつとねえ……ルナの日だったかしら？」

「……ルナ？」

どういうことだろう。僕が階段から落ちた日は水曜日だったはず。確か時間割に美術があったのだから間違いないよね。

正直もう何が何だかわからなくて僕は頭を抱えた。

「もしかして……ここって『異世界』……」

「あ、知らなかったの？ うーん。あなたのこの機械から分かったんだけど、あなたは『あっちの世界の人』だったのねー。ここ15年くらいいないからなあ、あっちの世界から来た人なんて」

「あっちの世界……？ 僕たちの世界の事を理解しているん……ですか」

「まあねえ……あなたの世界で言う『地球』の影の世界ってところかしら？ あなたたちの世界からはどうやっても見えない世界ね」

女性はそう言って腰に手を当て窓の外に目をやる。彼女の横顔はどこか遠くを見ているようだ。

「たぶん、もうそろそろこの世界に危機が訪れるわね……」

「危機……？」

僕の呟きに彼女は外を見たまま頷く。

「ええ。あっちの世界から人が来たってことは……たぶん、この世界が呼んだのね。あなたの事を」

「……」

影だの危機だの言われても正直ピンとこない。大体にしてどうして僕なのか？ 冗談じゃないよ、めんどくさい……

「どうして、僕なんですか……」

「そりゃあ、こっちの世界と波動が共鳴したんでしようね」

「はどう……？」

またでた。訳のわからないキーワード。

そんなこと言われたって僕はごく普通の一般人の高校生だ。そんなこと言われてすぐにわかる奴がいたら見てみたい……

「まあ、簡単に説明するとこの世界に来れたってことはあなたはこの世界の素質を持っているってことよ。あっちの世界では開花するはずのない力が眠っているってことね」

「魔法……とかですか」

「まあそうね。他にもあるのだろうけど……それは今後次第ね。――」

「あ」

女性はいきなり叫ぶとバツと僕の方を見た。……振り向くスピードがハンパなかったな。

「わたしはミーナ・フォース。この学校で剣術を教えています。あなた、名前は？」

「秋宮拓未……です」

「タクミね。名字、かしら？それは言わないほうがいいわ。なるべく混乱を広げたくないから。世界に危機が訪れるなんて聞いたらきつとあなたを狙うやつらが来るわ」

「……記憶喪失ってことにしておきます」

「それが一番無難ね。——ところでタクミ。あなた、この学校に入学したらどうかしら？文字は少し違うけど読めるはずだし、書けるはずよ」

「……魔法騎士になるつもりは……ないのですが……」

「そうじゃなくて、とりあえずこの世界の事や魔法の事について学んでおいてほしいのよ。——あなたはこの世界に『選ばれた人材』なんだから」

「……」

「この学校は寮生だから住むところに問題はないはずよ」

「……わかりました」

僕はミーナさんの言葉に頷くしかできなかった。確かに魔法とか興味深いし、使ってみたいしなあ……

こんなんだから友達がいらないんだけど。

自分で言うのはあれだけどなぜか女の子からの人気は高かった。なんでかは知らないけど。

でも、なんていうか……そう言う非科学的なこととかかなり気になるタイプだったし、まあ……世間一般的には『オタク』……なのだろうね。認めるのは何となく癪しゃくだが仕方がない。

「じゃあ、明日もう一度説明するわね。今日はここにいて」

「……はい」

……なんか知らないけど学校に通うことになるらしい。

そんなこんなで『こっち』の世界の魔法騎士学校に通い始めて早一ヶ月。僕の世界では行方不明になっているのだろうか……

学校ではなかなか成績もいい方だ。友達もそこそこできたけど、正直危機が訪れる感じはしないじゃん。

ミーナさんに聞いても『知らない』って言われるし。とりあえず、元の世界に帰りたいんだけど。

今日もそんなことを思いながら寮へ帰って行く途中だった。

『……どこ?』

「……！」

そんな声が頭の中に響いてきた。僕は歩くのをやめて目をつぶり、最近習った気配を追う魔術の詠唱を口にする。

「『我が目よ……かの者の気配をつかさどれ……目』」^{レンズ}

僕が詠唱を終えると同時に視界が一気に変わる。^{レンズ}目はその声を持ち主の気配を辿っているのです。その気配に追いつくまで視界はモノクロで、気配の持ち主が現れるとその人物だけその魔法の属性の色になる。

——そして、見つけた。

けどその人物に僕は見覚えがあり、眉間にしわを寄せた。

「……！三崎だ……」

僕は思わず目をあけそうになった。^{レンズ}目は目をあけると同時に魔術が解除される。簡単に解除できるので使える魔術だがそれはそれで厄介だった。

三崎——三崎リナは僕のクラスの女子でなんというか……僕とはタイプが違う感じの女子。2年生の中でもかなり成績はいい方だったよな……三崎は。

三崎はかなり混乱しているっぽい。……まあ、そうだろうけど。普通ビククリするよね。

——だけど、おかしい。どうして彼女がここにいるのだろう。

『……なんで君がここにいるの？』

思わずそうテレパシーを飛ばしていた。魔法の素質がない三崎に飛ばしても効果はないんだけど……なぜか飛ばしてた。

……僕、今のでかなり魔力使ったな。頭がくらくらする。
けど驚いたことに三崎にテレパシーが飛んだらしい。

「もしかして――」

『……その道に沿ってまっすぐ進んで……そこに、僕がいるから……』

やばい。もう、魔力が底を尽きた。

僕は立っていられなくなって地面に胡坐をかいて荒い息を整えた。
三崎の答えを聞く前に魔術を解いてしまったので彼女がちゃんとここに來れる保証はなかったけど、場所は近かったのでたぶん大丈夫でしょ……

（もう少し、休まないと……）

僕は三崎がいた方向を見つめてから空を見上げた。

――空はどこまでも青く、澄んでいた。

異世界に呼ばれた僕。

【TAKUMI】

（後書き）

次はどちらにしましょうか……

次はリナかな……

とりあえず二人には会ってもらわないと……

不思議なクラスメイト 【RINA】 (前書き)

リナちゃんとタクミ君が会いますよ

どうぞ!!

不思議なクラスメイト 【RINA】

「『まっすぐ進んで……』ねえ……」

声の主の正体はいまだにわかんない。でも、絶対聞いたことある……はず。

「……会ってみなくちゃ分からないよね」

わたしはそう呟きながら一本道を歩き続けた。
周りの景色はそんなに変化ないんだよね……正直のところ、方向がこっちであっているのかさえ分からなかった。

これで反対方向に進んでたら、わたし完ぺきにヤバイよね……

「……あ」

そんなことを考えながら歩いていたらわたしは思わず飛び上がりそうになった。

——町が見える。方向は正しかったのかも。

わたしは町の門をくぐるなりあっけにとられた。

「すっごお……キレイ……」

町は日本みたいに電柱とか、コンクリート、ましてや車なんてものは一切ない。

道路は綺麗なレンガが敷き詰められているし、なんだかとても心が落ち着くなあ……

ちよっと鼻歌なんか歌いながら町を探索していると、男の子が路地裏から出てきて、

「……やっと来たんだね」

って言った。……あれ？さっきの声……ってええ！？

「あ、秋宮君！？」

「……声、大きい……」

そう言っあきみやたくみて男の子は——いやいや、秋宮拓未は右手で右耳を押さえた。

秋宮くんはわたしのクラスメートで、友達からの人気も高かった優等生。

でも、どうして秋宮くんがこんなところに……

「なんで秋宮くんがここにいるの？」

「……それはこっちのセリフだよ……とりあえず、僕に着いて来て」

秋宮くんはそう言ってさっさと歩いて行ってしまった。わたしも慌てて歩き出す。

……というか秋宮くんの服もファンタジー♪そろそろ見慣れてきたよ。何て言っただって町の人もファンタジーだもんねえ」

「で、ここどこ？」

秋宮くんの後に着いて行ってみると、大きな学校……みたいなところの近くのかわいい家に入れられた。

部屋の中は2段ベットに二つの机にソファーそしてロフト、奥にお風呂……だと思うけどそんな感じの小さな部屋だった。

……で、さっきも言ったけど、ここどこ？

秋宮くんに聞くべく、わたしは秋宮くんを振り返る。

「……『魔法騎士学校』の寮」

「『魔法騎士学校』？……ちょっと待って。ま、魔法？」

「……ここが『異世界』って気づいた？」

「ま、まあ……一応、ね」

わたしは苦笑いしながら足元を見る。

……そう言えばブーツ、履いたままだったけどいいのかな？でも秋宮くんも靴のままだ。……まあいっか。

そんなことを考えている間に秋宮くんの言葉が頭に降ってきた。

「……ここは、僕たちの世界の影の世界……なんだって」

「へ？影？」

そんなファンタジー×ファンタジーみたいな話をいきなり切り出されて正直びっくり。

わたしは？マークが浮かぶ頭で秋宮くんの話を聞いてた。

「えっと、つまり、わたしたちは『異世界から呼ばれた』ってこと？ 危機を救うために？」

「……みたいだね」

秋宮——あ、違った。『タクミ君』の話を聞く限り、わたしたちは『選ばれた』らしい。でも、二人も呼ばれることはないって、どういことなんだろう……

「……僕はこっちに来てもう一カ月経つんだ……『そっち』では、どう、だった？」

「え？ 何言ってるの？ タクミ君は昨日学校来てたでしょ？」

「……行ってない」

タクミ君が眉をひそめて首を振る。

でも、確かに昨日授業受けてたよね……

「昨日だよ？ 美術の時間、先生に褒められてたじゃん」

「……授業受ける前に、僕はこっちに来たんだ」

「どういこと？ え、冗談でしょ？」

意味わかんない。一か月前？ タクミ君は昨日確かに授業を受けて

たよね？

——あれ？　そういえば階段から落ちたって聞いたような……

「昨日階段から落ちたよね？」

「……階段から落ちて、こっちに来た」

「つまり……『こっち』では一ヶ月経ってるのに『あっち』では一日にしかたってないってこと？」

「たぶん」

「で、しかもタクミ君であってタクミ君じゃないのができたってこと？」

「うん」

ややこしい……てか、わたしの頭でよく理解できたなあ。てかわたしもタクミ君みたいにもう一人できてるのかな……
なんかちょっと心配になってきたな。

「で、三崎はどうするの？……学校には通うとして、名前……」

「わたしの名字だね……」

そう言えば家で書いてたマンガにファンタジー系のあったっけ？
その中のキャラクターから名字取ろうかな？
しばらく考えてからわたしはひらめいた。

「……『クレース』なんてどうかな？」

「『クーレス』……いいんじゃない、かな」

「ありがとう」

『いいんじゃない』ってところタクミ君、ちょっと噛んだよね。そんなこと言えないけど。

「で、学校って何するの？」

「……魔法の事を習ったり……剣術を覚えたり……いろいろあるけど、入学試験とかはない……」

へえ、入学試験ないんだあ……てか、窓から見えるあの学校みた
いなのはやっぱり学校だったんだ。

学校の作りもレンガ造りできれいだなあ。美術館とか図書館とか
教会とかそっちの方がしっくりくる形だよなあ。

わたしは窓の外を見ながらタクミ君に質問してみた。

「で、どうやって入るの？」

「……ミーナさんに聞かないと」

「ミーナさん？」

首をかしげるとタクミ君はミーナさんについても教えてくれた。
もちろん学校の事も。まあ、魔法とか面白そうだしなあ。

その素質あるって言われたらやらないほうが損だし。

「……とりあえず、今日はここに泊まりなよ」

「へ？……ええええ！！」

いきなり何言ってるねーん！イエーイ壊れた☆
そりゃそうだよ。うん。

タクミ君？さらっとヤバイこと言ったよ。高校生の男子の部屋に
泊まるなんて……

それに気がついたのかタクミ君はわたしの方を見てからベッドに
腰掛けて、呆れ顔で小さく呟いた。

「……もう一人いるから、別に驚かなくても……それに僕、今リナ
が考えたみたいなこと、興味ないから……」

「……そうですか」

ちょっとその発言むかつく^^女の子目の前にしてその発言はど
うよ？

……まあ、別にいいけどさあ。タクミ君は何気に苦手なキャラだ
ったりするし。

でも、もう一人って誰だろう？

「ねえ、そのもう一人の子は？」

「……もう少しで帰ってくるんじゃない、かな」

そう言ってタクミ君はごろんとベッドに寝転んだ。

「……適当に……座ってて」

「はーい」

適当に返事をしてソファーに座った。

——そんなこんなでわたしの学校生活が始まろうとしていた。
っていきなりどたばたしすぎだったの！！

不思議なクラスメイト 【RINA】（後書き）

リナちゃん、頑張れ！！

でもってたぶん次は学校の事なのでタクミ君ですね。

リナちゃんとタクミ君ばかり^^；

次はお友達も登場ですよ！

学校？ **【TAKUMI】** **(前書き)**

学校についての説明です。

でもまだまだ序盤……

学校？【TAKUMI】

三崎——じゃない、『リナ』に説明を終えてから約1時間くらい。やっともう一人のこの部屋の住人が勢いよく玄関のドアを開けて帰ってきた。

そして第一声。

「誰だよこの子！？めっちゃ可愛いじゃねえか」

「……僕の友達」

「お邪魔してます」

帰ってくるなり鼻の下伸ばさないでよね……

こいつはヴェル・ローリア。女子みたいな名前だけど男。

身長は170くらいだから僕とほとんど同じのはず。髪はさらさらの金髪。服装は黒のロングコートに白のTシャツ、ジーパンみたいなダボツとしたズボンに黒のローファーっぽい靴。顔立ちはさわやか系だけど、性格は軽い。軽薄。でも友達。

「友達って……お前記憶喪失なんじゃねえの？」

「……さっき町で会って思い出した」

「はじめまして、リナ・クレーレスです」

リナがそう言って丁寧にお辞儀した。
ヴェルが調子に乗る3秒前。

3、2、1……

「俺はヴェル・ローリアー！！リナかぁ、きれいな名前だな！！俺、目ぼれしたかも……」

「あはは……どうも」

……カッコつけたのにリナには効かない。逆に引いてるよ、リナが。……どんまい、ヴェル。

「……リナも魔法騎士学校に入るんだって」

「え、マジか！？よっしゃっ！！」

「で、泊るところないから……今日はここに泊めるから」

「ま、マジかよ！！」

……だから鼻の下伸ばすなっつての。さすがに僕だってリナが心配だ。

「……リナに近づいたら、遠慮なく魔術飛ばすから」

「なっ……！！タクミ、お前リナちゃんとそんな仲だったのか……！？」

「ヴェルが何するかわかんないから。厄介事に巻き込まれるのごめんだし」

「わたしたち『ただの』友達だし」

慌てるヴェルにリナと2人で即座に否定。勝手な妄想は夢の中だけにしてよ。いちいち突っ込むの面倒なんだからさあ……

そんなこんなで寝る時間になり、2人が寝静まったところに僕は起き出した。

……胸騒ぎがする。ヴェルの事じゃないのは確かだけど。寝てるし、アイツ。

いつも通りご飯食べて、風呂入ってヴェル、とりナと話して……胸騒ぎの意味がよくわからない。

「……気のせい……か」

僕は深呼吸をしてからまた眠りに着いた。

「……まずはミーナさんに話を通してもらわないと」

「な、なんか緊張するなあ……転校生になった気分」

そんなことを言いながらリナが学校をきろきよろと見回している。その目はかなりきらきらだ。

「俺、先に教室行ってるからな」

「後で」

途中まで一緒に来たヴェルだけどミーナさんが苦手らしい。さつさと階段を上がって3Fにある僕たちの教室に行ってしまった。……ミーナさん、授業中無茶苦茶厳しいもんなあ……

「魔法学校って、わたしたちの世界の高校とは全然違うんだねえ……同じかと思ってた」

リナが窓の外の魔法自習場を見ながらそう呟いた。こんな朝早くから魔法の練習をしてる人が何人かいた。まじめだなあ……朝から部活並みに汗かいてるし。

窓の反対側の教室からはざわざわと生徒たちが話している声が廊下まで聞こえる。こっちは朝からテンション高いなあ。

話を戻して……リナの言ってることはよくわかる。高校に比べたらかなり広いし、設備もちゃんとしてるし、なにより勉強自体が少ないからなあ……

それに、ここの学校は魔法の力でかなりきれいに完備されている。外のレンガの壁はかけてるところなんてないし、いつ見てもピカピカだし、廊下のフローリングだってほこりなんか一つもなかった。

「……ここの学校、この世界で唯一の『魔法騎士学校』なんだって」

「世界で唯一！？超名門じゃん……」

リナが額に手を当てて思いっきり肩を落とした。……この世界がめっちゃくちゃ狭いこと、知らないんだ……

「この世界は……日本くらいの大きさしかないよ。やたらと小さい」

「えええ！？世界が日本規模！？」

「だから日本人の僕らが呼ばれたんでしょ……たぶん、国ごとに異世界に通じる何かがあるはず」

「うーわー……」

途方もない話に言葉を失うリナ。どんなに頭のいいリナでもそりゃさすがにビックリするよね……こんな僕でさえ驚いたことなんだし。

そんな感じで簡単にこの世界について説明してるといつの間にか学校の1Fの学校の西側にあるホールに通じる通路の隣の武器保管室に着いた。

ミーナさんは大体ここにいる。

「……失礼します」

僕はノックをしてからドアノブを握ってドアを開ける。あ、やっぱりいた。

でもミーナさんは剣やら杖やらの手入れをしていて僕の声には気づいていないようだ。……こっちも目がきらきらだ。さっきのリナと同じ目をしている。

けど、リナはミーナさんとは対照的になんだか緊張していて、さっきまでのきらきらは消えていた。

武器保管室は学校の生徒が使う武器が保管・完備されているところで自分の武器を持っている生徒以外はみんなこの武器を使っている。

杖は殴っても死にはしないが、さすがに剣は危険だ。レベルが高い生徒しか扱えない。

……それに、日本では剣なんて持ってたらず捕まるからなあ……リナは見るのすら初めてだろうから緊張しているのかもしれない。

「……あの、ミーナさん？おはようございます」

「……あら！タクミ君。おはよう。――？その子は？」

「実は――」

僕はリナの事を簡単に説明した。リナはというところと慣れてきたのかいつも通りの調子に戻ってきたようだ。――テンション高いし。

「もう一人あっちの世界から来たってことね」

「……普通1人なんですよね？どうして2人も……」

僕は首をかしげてミーナさんの顔を見た。ミーナさんは何かを考えている様子だった。

そして顔をあげてリナを見る。

「リナちゃんも学校に入学ね……とりあえずは」

「あ、はい」

急に名前を呼ばれてビックリしたのかリナは慌てて返事をした。

「でも入学は明日ね。今日いきなりはさすがに難しいから。今日は見学して行って構わないわよ」

「あ、ありがとうございます!!」

柔らかに微笑んだミーナさんに向かってリナは勢いよく頭を下げた。ポニーテールの髪がバサ!! っとなる。

リナに説明しないとな。

そんなことを思っふと時計を見ると……

「ヤバい……後5分で教室に行かないと……」

すでに8..10だった。僕たちはミーナさんにお礼を言ってばたばたと階段を駆け上がる。

……とりあえず、学校の事をリナに説明するのは後回しになりそうだ。

学校？ **【TAKUMI】**（後書き）

説明が足りないとピンピン感じます……
何かありましたら遠慮なくおっしゃって下さい。
m
┌
└
m

学校？ **【TAKUMI】**（前書き）

『学校？』の続きです！！

タクミの友達登場ですよ^^

どうぞ！！

学校？ 【TAKUMI】

「さっさと席に着けー」

担任の先生がパンパンと手をたたく。遅刻ギリギリのところでは教室に滑り込み、なんとか先生が来る前に席に着いたので息はハ
ンパなく上がってる。

リナはというと、とりあえず教室の前で待ってもらってるけど……
……まあ、大丈夫だよな。

「今日は魔法の実技テストの日だったな。ちゃんと練習したか？」

「せんせー俺、剣術の方がいいです」

ヴェルが体を机に預けた状態でだらしく手を挙げてそう言う。

……前にも言ったけど剣術はレベルの高い生徒しか扱えない。
ましてやヴェルは魔法すら完ぺきにできないのに……

アイツが剣を持ったら、僕、絶対的な確率で剣で刺される。

……じょーだんじゃないよ。そんなん死にたくない……

「馬鹿言うな。お前に剣なんて預けたら学校中ぼろぼろになるぞ？」

先生の言葉でクラス全員が笑みをこぼした。それと対照的にヴェ
ルは口をとがらせている。

「ちえ……ひでえなあ」

「……ヴェルは魔法を徹底的に覚えてから」

「タクミまでそんな冷たいことゆーなよお」

「はいはい」

軽く受け流す。ヴェルに構っていると時間がもったいないような気がするのは気のせいじゃないよね。

（HRが終わったらリナに学校の説明をしよう……かな。面倒だけど……）

心の中でそう呟いて僕はぼーっと先生の話を聞いてた。

HRの時間が終わり、僕はヴェルの抱きつき攻撃を最近習った体術でかわして教室のドアを開ける。教室のすぐ横にリナは膝を抱えながら座ってた。

「あ、終わったの？」

「一応」

……ああ……この学校の説明か……説明することが妙に多いんだよなあ……

そんなことを思っていた時。

「あ、タクミが知らない女の子と一緒にいる」

「ほんとだ。タクミの知り合い？」

……どうしてこうタイミングがいいのかなあ……声をかけたのは隣のクラスのティナ・マリクとティト・マリク。名字であれ？って思った人もいるかもしれないけど、二人は双子。

僕はリナを指差して二人に説明。

「……これ友達」

「リナ・クレーレスです。明日からこの学校に通うことになったから見学に――」

「わあ、女の子の転校生だあ！！」

そう言ってティナははしゃぎ出した。ティナたちは僕らの一つ下――つまり16歳な訳だけど身長は150くらいで顔も幼い。髪は薄紫色で目は澄んだ青色をしている。

服装はピンクのジャケットに白のレースの付いたTシャツ。それから少し薄いピンクのふんわりとしたスカートにリナと同じようなブーツをはいている。

でもってティトも同じ髪色で僕よりツンツンの髪、目はティナよりも少し濃い青。身長は165くらい。服装は濃い青のパーカーに白のデザインが変わったタンクトップ。七分丈のグレーのズボンに白の靴を履いている。

「……で、説明しようとしてたところ」

「あ、そっかあ!!じゃあわたしも手伝うね!!」 「僕も協力するよ!」

来た。世話好きブラザーズ。僕の時きも率先して色々教えてくれたけど……世話を焼きすぎるのも問題だと思うわけで。

まあ、そこは僕が止めなきゃいけないってことで。ああ……説明の手間が省けたけどまた新たに面倒なことが……勘弁してくれ。

「じゃあ、まずは学校の目標とかかなあ?」

ティナが左手の人差し指を顎に当てて、リナを見つめた。

「えっとねえ、この学校はみんな魔法騎士なるために来てるんだよ
お」

「それで、レベルが騎士なれるほどに達すると帝都の城で試験が行われるんだ」

ティトがティナの言葉につけたしをする。

……僕の言うはずだったことはとりあえず言ってくれたし、まあラッキーかな。

「で、その試験で合格すると魔法騎士になれるって訳」

「へえ、なんか本格的……」

リナが小さく『専門校みたい』って言うのが聞こえた。……こっちに来て妙に五感が鋭くなったような……体力も上がってるみたいだし。

「授業は魔法とか、剣術とか、体術とか……たまにお祭りもあるんだよお」

ティナがにこにこの小学生みたいな顔でリナの手を握る。さすがのリナもビックリしてる。

「リナは今日からわたしの友達！！よろしくねえ！！」

「う、うん！」

リナもにこにこで頷く。ティナのにこにこ笑顔とリナのにこにこ笑顔はなんか違う。……どうでもいいか。

「……まあ、施設とかは案内書とか見ればすぐにわかると思うよ」

「そっか、ありがとう」

ティナの手を握りながらリナはそう言って僕に微笑んだ。

……しばらくは学校生活を送ることになるんだろうなあ……
面倒事はなるべく避けたいなあと思った瞬間だった。

学校？ **【TAKUMI】** **（後書き）**

新キャラのティナ&ティトくんです^^

次からは学校生活になると思われます!!!

何かありましたら遠慮なく教えてください!!

魔法 【RINA】 (前書き)

初めての魔法にリナちゃんはビックリ!?

どうぞ!!

魔法【RINA】

昨日、タクミ君とティナたちに学校の事を教えてもらって……そして今日、わたしはこの学校に入学することになった。

クラスはミーナさんが口添えしてくれたのかもしれないけど、タクミ君と同じクラスなわけで。

……おまけのヴェルがくつついてるのがちょっと嫌だったりするけど。

「はじめまして、『リナ・クレース』です。よろしくお願いします」

そう言いながら頭を下げる。

クラスの人数は35人くらい。タクミ君から聞いた話によると大体年が近い人同士で学年が決まって、その中から優秀な人は本格的に騎士の勉強をするみたい。

この学校は上は20歳、下は13歳と以外に幅広い。だからクラス数もちろん多いわけで。

その中で17歳の私は16歳から18歳までの人たちと同じクラスに行くことになった。

「えー、リナさんは最近この町に引越してきたそうだ。分からないことが多いと思うから、これから仲良くしてあげるんだぞー」
アクトリス

担任の先生がわたしに席に座るように指示してくれた。

わたしの席はタクミ君の隣の窓際の席。窓からはベランダがあるから外はよく見えないけど、町並みは十分すぎるくらいきれいに見えた。

そんなわけで休み時間に入り、わたしの机の周りはクラス全員で囲まれて質問攻めにあっていた。

「リナって、前はどこに住んでいたの？」

「どんな魔法が得意？」

「年いくつ？」

……転校生扱いなんだよね。そうだった、そうだった。だからって一気にクラス全員で囲まないでください。何言われてるかわかりません。

まあ、なんとか笑顔で全員の質問に答えて、わたしは午前の授業に臨むことになった——ってチョイ待て。

「（午前の授業、魔法実技だったー！！）」

どーすんのよ、わたし。

こっちに来て3日。一度も魔法なんて使っていないんですけど。

……午前の授業でいきなりヤバいことになりそうだと心の中で頭を抱えた瞬間だった。

授業を受けるべくわたしたちのクラスは『魔法自習場』に向かっていた。

午前の授業はさっき言ったけど『魔法実技』。魔法をうまく使えるようになるために基礎を治して正しく使えるようにするんだってで、わたしは何すればいいわけ？

それでかなりテンションが下がったわたしの顔をタクミ君が覗き込む。

「……どうしたの？元氣ない」

「……魔法なんて使ったことアリマセン。」

タクミ君は「ああ」という顔で頷いた。そういえばクラスの子が「タクミはすごい魔法を使う」って言ってたっけ？そりゃ一ヶ月もこっちにいればそうなるか。タクミ君頭いいもんなあ。

で、わたしはなにすりゃいいのよ。

「……あっちに着いたら教えてあげる」

「あ、はい？教えるって——」

「……」

「ちょ、待ってよ!!」

タクミ君はそう言ってさっさと歩いて行ってしまった。

そんなに簡単に教えるとか言わないでください。絶対に暴走するよ？だいたい、わたしに魔法が使えるのかもわからないのに……

そんなことを思いながら先に行ってしまったタクミ君を追いかけると『魔法自習場』に着いた。

「で、どうやって使うの？あと10分で授業始まるよ？」

わたしはちよつとイライラしながら聞いてみる。正直わたしの立場を考えてほしいと思う。いくらタクミ君でもわたしに魔法を使わせるなんて無理だと思うよ？

「……こっちに来て。初めて魔法を使うんだから、人前でやったら……危ない」

「……」

ごもつともだよね。タクミ君は魔法自習場の学校の向かい側の方角にある森(?)みたいなところに入って行く。わたしも重い足取りで後を追った。

タクミ君がいたところは森の広場みたい開けた場所。そこでタクミ君は話し始めた。

「……簡単に説明するけど、キミの魔法属性は水と光の魔法。簡単な水の攻撃魔法から、やってみる」

「み、水？」

わたしはちよつとびっくりして聞き返した。水の魔法って簡単だって言えるのかなあ……

「……ちよつと見てて」

タクミ君はそう言って手で構えをとる。

そして。

「……ほら。これくらいならできるはずだよ」

タクミ君の右の掌から木に向かって水の矢が放たれてザクっていう音をたてて木に刺さった。

すっごー！！間近で見ると初めてだけど魔法ってやっぱり凄いなあ……

でも、どうして刺さったままなんだろう？

「……これ水だね？どうしてこのままの形を保ってるの？」

「僕がイメージを解いてないから。……ほら」

タクミ君が手を下ろすと同時に水の矢はザア、と木の根元に流れ落ちる。

えーっと、つまり？

「ようするに、イメージするといいいんだね」

「……そういうこと。掌に魔力を集める感じをイメージして、手元に力が集まってくる感じがしたら水をイメージする。そして発動」

「……なんとなくだけどわかったような……」

「やってみなくちゃ分かんない。イメージして。時間もないし」

「わ、わかった」

わたしはタクミ君に言われた通りに掌に魔力っていうか気(?)を集中させた。そして目をつぶって頭の中でイメージ。

「(水——水の矢!!)」

すると。

ザク

さっきのタクミ君の魔法が木に刺さったときの音がした。恐る恐る目をあけると——水の矢が深々と木に突き刺さっていた。うわーこれはリアルにビックリ。

わたしにも出来た。本来過ごしていた世界では使えるはずのない『力』が。

タクミ君がフツと小さく微笑んで口を開く。

「……やっぱりできるじゃん」

「……そりゃどーも」

タクミ君のちよつと冷たいほめ言葉に軽く答えてわたしはイメージを解く。

言葉と顔ではかなり冷静に言ったけど内心、超が付くくらい興奮してたし、怖くもあった。この力を使えば何でも出来てしまうのでは?って考えた次第で。

……まあ、ヤバいことに使わなければ問題ないか。

「……こんな感じで繰り返していけばもっとうまくなるし、強力な魔法も使えるようになる」

「へえ……すごいんだね」

いまだに魔法を使えたことに興奮してわたしは自分の掌を見つめた。

掌に何ら変わりはないけど。でも、不思議と温かい感じがした。

「これで授業は何かなるでしょ？」

「うん！ありがと」

タクミ君の問いかけに笑顔で答える。……とりあえず、先生に迷惑かけることはなさそう。

「……早く行こう。授業始まる」

「はーい」

魔法自習場に向かって歩き出すタクミ君の背中に返事をしてわたしもタクミ君の後を追ったわけで。

このとき、まさか敵を作ることになるなんて思わなかったけど。

魔法【RINA】（後書き）

リナちゃんの敵とは一体……！？

（1）ヴェル

（2）クラスの生徒

（3）他のクラスの生徒

この中の誰かにしようと思います。

意見がありましたら感想でもメッセージでも書いてやってください
！！

ライバル!? 【RINA】(前書き)

リナちゃんの敵とは……
ライバル

そういえばPVが1000を超えていてビックリΣ(。D。)
読んでくれる方いるというのは励みになりますね!!

これからリナちゃん&タクミ君の活躍に応援よろしくお願いいたします!!

では、どうぞ!!

ライブル!? 【RINA】

……はい、授業が始まりました。うん。それはいいんだけどさ……

「なんでタクミと仲いい上にあたしより強力な魔法使えるのよ!」

はい。わたしなんか小さい子に絡まれております。どこから来たのこの子。同じクラスの子だったかなあ?

髪の色はきれいな銀髪。長さは肩くらい。顔立ちはかわいい。でも今はかなり怒ってるっぽい。

服装は黄緑の変わったデザインのベストに、はちみつみたいな色のTシャツ。ズボンは七分丈のロールアップジーンズ。靴は茶色のローファーみたいなやつだった。

てかオーラが……めっちゃ怖いくらいなんですけど。なんで初日にこんなことになるのかなあ……

【20分くらい前】

「これから魔法の実技授業を始めるぞーリナは転校してきたばかりだからそうだな……」

魔法担当の先生が生徒たちを見まわしながら先生があごに手を当てた。

「……タクミ君、杖とかいらなの?」

一応先生のお話中だから声を絞ってタクミ君に聞いてみた。

「……今日の実技は簡単な魔法だけだから。……ほら、さっきやっ
たみたいなのやつ」

「あ、そっか」

そう言ってわたしは頷いた。
なっとくなっとく。だからクラスのみんな何も持っていないのか。

に、してもこっちに来てタクミ君の印象、かなり変わったなあ……

「——タクミ!!」

「はい」

いきなり先生がタクミ君の名前を呼んだ。——話してたのばれた
のかなあ。ちよっと焦る。

「リナと一緒に今日は授業を受けてくれ。頼んだぞ」

「……わかりました」

先生の言葉にタクミ君が頷いた。

なんだ、ばれたんじゃないのか……

うん。まあ、わたしもタクミ君が教えてくれるなら安心だ。

「じゃ、授業を始めるぞー」

……で、授業が始まったわけで。タクミ君とヴェルとわたしは一

緒に授業を受けてたんだけど……
ここからがあの子が来た原因っぽいんだ。

「リナってさく水属性なんだよなあ」

「そーだよ」

両手を頭の後ろで組んだヴェルがタクミ君の魔法を見ながらわたしに問いかけてきた。適当に返事してタクミ君に視線を戻す。

……やっぱり凄いなあ。タクミ君が使った魔法は火の魔法。でも他のクラスメイトとはケタ違いの鋭さと大きさの魔法。

タクミ君の横顔はなんだかいつものめんどくさそうな顔じゃなくて真剣な横顔だった。

「……見てないでやりなよ」

手を下ろしながらタクミ君が呟く。

うん。確かにさっきからわたしたち見てばっか。やんなきゃ、やんなきゃ。

「うーん。じゃ、やるとするかねえ」

「ちょっと待て。……ヴェルは僕と一緒に」

「ちょい待てや。リナちゃんはどーすんの」

「リナは一人でも、平気」

タクミ君。断言しちゃったよ。ああ……ほら、ヴェルがへこんだ。

「でも、わたしさっきの魔法しかできないよ？」

「……大丈夫。さっきのを完ぺきにできるようになれば他のも出来るから」

「さっき？ やっぱ二人って——『ただの友達』 あ、すみません」

ヴェルの勝手な妄想は本日も暴走しまくってます。わたしとタクミ君は同時にヴェルを睨んで黙らせた。周りの目が痛いので大きな声で言わないでください。

「じゃ、お手並み拝見かな？」

「それほどの魔法使えないんだけど？……期待はしないでねっ！！」

わたしはさっき教えてもらった通りイメージして——魔法を放った。おーさっきよりきれいな形だあ。イメージがちゃんとできてきた証拠かな？

わたしは飛んでいる水の矢をイメージを解いて水に戻す。

そして手をおろしてからヴェルを振り返った。

「……ほら。これくらいの簡単なものしかできないんだよ？」

「へえ、水の矢かーあれ、タクミが教えたの？」

ヴェルがわたしを指差しながらタクミ君を振り返った。タクミ君

は頷く。

「……水系の魔法は詳しくないけど、本で読んだやつ、そのままイメージした」

「お前、ほんと頭良すぎだろ。本読んだだけでそんななるか？」

「知らないよ……」

タクミ君がめんどくさそうに話を強制的に終わらせた。

……タクミ君、その『めんどくさい』オーラなんとかしてくださ
い。

「でも『簡単』とか言うけど、その魔法、攻撃魔法だろ？ レベルで言うなら中級くらいの魔法なんじゃ……」

ヴェルはあきらめたのかわたしを見てそう言った。

でも、正直のところタクミ君の真似みたいなものだからよくわからない。てか、冷静に考えると真似でやってるのってある意味危険じゃん。

そこまで考えたとき。

現在に至るわけです。

「転校生のくせにい！！なんなのよお！！」

女の子がそう言って地団太を踏む。

ちよ、待ってよ。まわりのクラスメイトが逃げて行ってるような

気がするんだけど？

「え、えっと……いきなりそんなこと言われても……」

「……というより仲良くない」

タクミ君がため息まじりにそう呟く。わたしも何度も頷いた。

……ああそっか。この子、タクミ君が好きなのかあ。なるほどく
つて、誤解じゃん。わたし。

「あの、わたしたち『ただの』友達なんですけど？」

「……なによ。友達ですって？——タクミ！！わたしとこの子、ど
つちが好み！？」

いきなりなんて振り方だ。ほら。タクミ君ものすごく嫌そうな顔
してるじゃん。

「……そういうの興味ない」

「ちょ、ちゃんと答えなさいよ！！」

女の子がそう言ってタクミ君に詰め寄る。それを止めたのは——
ヴェルだった。

「ちょいちょい、リランちゃん、タクミは照れてんだよ。だから、
な？」

ヴェルが右目をつぶって女の子——リランに向かって手を合わせ
た。リランはまだ怒ってるみたいだけど、とりあえずは落ち着いた

みたい。

「……わかったわよ。——でも!!」

「は、はいっ!!」

ビシッと指を刺されて思わず背筋が伸びた。

……わたしより小さい女の子に背筋を伸ばすってなんか変な感じだけど、それくらいの剣幕だった。

「アンタには負けないんだからね!!」

そう言い残すとリランは走り去ってしまった。ふう。とりあえず一件落着……

……ちょい待てや。今の宣戦布告……?

「宣戦布告されたー!!」

「……ライバル視されたみたいだね」

「あっはっは!!こりゃ面白くなりそうだなあ!!」

「ヴェル、アンタ一回死んでみる？」

「謹んで遠慮させていただきます」

ヴェルが慌てて頭を下げて謝ってきた。

ほんとにどーすんのよ、わたし。勝手にライバル視されちゃってるし……てかほとんど誤解じゃない!!……寮のメンバーがリランじゃないことを祈ろう。そうするしかないよね。

てかなんでこうなんの！？わたし誤解されたまんま！？

「タクミ君から言って来てよ。リランに」

「……僕、リラン苦手」

「わたしの誤解を解くために行ってきて！！」

「やだ」

それだけ言うとタクミ君はさっさと逃げてしまった。
もう追う気力もありません。わたしはあきらめてため息をついた。

学校生活初日でわたしになぜかライバルができてしまった。
……明日からどーすんのわたし！！

ライバル！？ **【RINA】**（後書き）

最初はライバル、ヴェルにしようと思っていたのですが……女の子
キャラを追加してみました。

リランちゃんは身長155くらいです。ティナちゃんよりは大きい
ですよ^^

調べ物 **【TAKUMI】** (前書き)

タクミ君が調べ物をします。簡単に言いますと説明だらけです（
ω ー ; ）

まあ、まわりでぎゃあぎゃあ騒ぐのはお決まりです。

どうぞ！

調べ物 【TAKUMI】

リナに魔法を教えてから3日たったかな……僕は——じゃない、『僕ら』は2Fの僕らの教室のちょうどま下にある食堂で学食を食べている。

『僕ら』のワードにうすうす気づいてる人も多いかもしれないけど、僕はなぜか大人数で昼ご飯を食べる羽目になった。

「……なんでみんなして一緒にテーブルに座るの？」

「えーだってオレはタクミの親友だろ？」

ヴェルが口をとがらせる。その隣でマリク兄妹が、

「お友達と一緒に食べるのって楽しいでしょ」

「僕たち2人で食べるより、人が多いほうが楽しいし」

そんなことを言って顔を見合わせる。で、

「わ、わたしはティナに誘われて……」

リナが顔をそらしながらパスタを口に運んだ。

……リナまで。僕、今日は一人で食べたかったのに……なんで今日に限ってみんな来るのかなあ。

「でもよお、ある意味オレらだけじゃないかもなあ」

「……なんで？」

ヴェルが親指をたてて自分の背中の方を指す。僕はヴェルの隣に座っていたので振り返って確かめた。

その先にいたのは。

「リランだねえ」

うん。ティナの言うとおり、リランが他の女子たちと一緒に学食を食べながら僕たちの方をがん見している。

これ、ある意味ストーカーじゃ……リランがリナに宣戦布告をしてからというもの、僕たちは後を付け回されてる。勘弁してよ……

「……リナちゃんも大変だよなあ」

ヴェルの言葉にティトがオムライスの最後の一口を食べながら首をかしげた。

「もぐもぐ……リナとリランって友達なの？」

「友達って言うか……」

「ライバルでしょ」

めんどくさいから二人の関係性をあっさり断言。僕はさっき買ってきたばかりのおにぎりを口に運ぶ。

前から気になってはいたんだけど、こっちの世界にも日本の食べ物置いてある。

……やっぱり日本の『影の世界』なんだな。でも『影の世界』が『異世界』だったとは知りたくなかったけど。

「ごちそうさまでした」

「タクミ、それだけでいいのか？ 少なくね？」

手を合わせた僕にうどんをずるずるすすっていたヴェルは首をか
しげて僕のお皿を見る。

「……これから調べたいことがあるから。じゃ」

これ以上あの人たち（特にヴェル）に邪魔されたら調べものどこ
ろじゃないからね。僕はお皿をカウンターのおばさんに預けて、ま
だ昼ご飯を食べている生徒たちでにぎわう食堂を静かに出た。

図書室は3Fの僕たちの教室の反対側にある。

階段の手すりに手を置きながら、階段をゆっくりと上がって行く。
この学校は階段にも窓があって、電気がなくても常に明るい。

「（図書室にあった世界の歴史についての本はあんまり数がないか
らなあ……魔法の本も合わせて探してみよう）」

約1か月前にこっちに来た時から何度も通っている図書室。この
学校は大きな学校だから収容されてる本もかなりの数。

最初のうちは魔法の事を早く知りたくて通っていたけど、今は世
界の危機について調べている。

「（……早く行こう）」

僕は階段を上がりきって少し足早に図書室に向かった。

軽い図書室の扉のドアノブを握って扉を押した。入って左側に見えるカウンスターにいつもの姿が。

「……また当番なんだね。『リヨウ』」

「まあね。タクミは毎週来るよね」

僕に皮肉を言ってきたこいつは『リヨウ』。僕らと同じ学年。でもクラスは違う。

青い髪を後ろだけ伸ばして黄色のゴムで結んでいる。服は白のYシャツに紺のジャケット。ズボンは少しだぼとしたグレーの長ズボン。

一見すると普通の高校生の制服みたいな恰好をしてるから初めて会ったときは僕らの世界から来た人なのかと思ったけど髪の色と目の色で「こっちの世界の人か」って判断した。

……でも、僕、こいつは変わってると思う。

「で、今日は何探しに来たの？」

「歴史の本と魔法の本」

「ほーまた勉強かぁ。ほんとすごいよね、キミは」

「……」

褒めてんのか褒めてないのか。言葉は褒めてるけど顔はあからさまに馬鹿にしたような顔。……こいつほどめんどくさい奴は――あ、ヴェルよりはましか。

僕はリヨウの前を通り過ぎて図書室の一番はじめの本棚から世界の歴史と魔法についての本を持って椅子に座る。

他に何人か生徒がいたけどみんな静かに本を読んでいるから図書室に流れる音は本をめくる音と本を探す生徒の足音だけだった。

「（やっぱり、僕らの世界からこっちの世界に呼ばれた人が何人もいる。……でも、どうして僕たちのときは2人なんだろう？……どの本も1人なのに）」

謎は深まるばかり。世界の危機の事についてはなんとか把握できた。その年代ごとに起きていることが違う。例えば、モンスターの暴走、戦争、魔力の低下とか。けど、今回一体ということが起きるのかまでは分からなかった。

そして、なんで僕だけじゃなく、『リナ』まで呼ばれたのかも。

「何読んでんだ？」

「!」

いきなり声を掛けられて僕は飛び上がりそうになった。なんとか飛び上がらなかったけど。

で、いきなり声をかけてきた犯人は……

「……なんでここにいろの？ヴェル」

……こいつ、今度声かけてきたら吹っ飛ばす。そんなことを思いながら僕は振り向かずにヴェルに訊いた。

するとヴェルの後ろからまた面倒なことを起こしそうなメンツの声が出た。

「わあ、図書室に初めて入ったあ!!」

「だめだよ、ティナ、図書室は静かにしないと――あ! この本一回でいいから読んでみたかったんだ!!」

「ちょ、ちよつと2人とも……静かにして!」

……注意しているリナの声も相当大きな声。ああ、周りの生徒がすぐく睨んでる。怖い怖い……

って、僕も睨まれてるっぽくね?

「……」

面倒なことはごめんなので僕は4人に静かに魔術をかけた。かけた魔術は先生がたまに使う、簡単に言う和金縛りみたいなもの。レベルは中級らしい。

「……」 「……」 「……」

ヴェル、ティナ、ティトはとりあえず体の自由を全体的に奪った。リナに関しては口だけに魔術をかけて開かないようにさせる。

「……図書室ではお静かに」

「「「……ふいあふえん」」」

ヴェルたち3人が棒立ち十口をふさがれている状態のままたぶん、「すいません」といった。リナは周りの生徒に慌てて頭を下げる。

……口をふさがれてまでしゃべろうとするこの3人はほんとに元気だと思う。でもそれも場所を選んでほしいわけで。

「……」

とりあえず僕の座っている席の椅子に全員座らせて僕は静かな中で魔法に関しての本のページをめくる。

座ってるだけで何もできないトラブルメーカー3人はいつの間にかすうすう眠っていた。

その時、リナに話しておきたいことがあったのでリナの魔術だけは解く。

「……ここ、見て」

「通常魔法？なにこれ？」

リナの問いに僕は簡単に答える。

「……一般人でも使える簡単な魔法。念話とか、気配を追う追跡魔法、後はいろんなところで使う、火とか水とかの自然のものを出す魔法のこと。応用に思考魔法、幻術魔法、浮遊魔法がある」

ちなみに思考魔法は相手の考えを読みとる魔法。幻術魔法はそのまま相手に幻術を見させる魔法。そして浮遊魔法は物を浮かばせる魔法の事。浮遊魔法は『物』に限るから人間は浮かばせられないって言うのがちよつと残念だったりするわけで。

その説明を聞いたリナが僕の手元の本を覗き込みながら呟く。

「へえ……じゃあこれは使えないとダメなんだ」

「あとで読むと……いいと思う。あと、応用魔法にはその人の素質に合わないと思えないから注意して……」

僕の場合思考魔法が使えない。その他は使えるけど、素質が合わなかったらしい。

僕は本を閉じて攻撃魔法の本を取り出した。

リナは頷いて微笑んだ。

「うん。わかった」

リナの返事を聞いてからその本ともう一冊リナに読んでおくように勧めて僕は攻撃魔法の本を手取る。

そのころには生徒たちの冷たい視線も消えていて、聞こえるのは最初と同じ音と、3人の寝息だけ。

その中で僕はペラペラとページをめくって行く。

「（……やっぱり。攻撃魔法は簡単なものならイメージするだけでいいけど他のは詠唱とイメージ、両方が必要になるのか）」

僕が前に読んだ本は『とっさにできる攻撃魔法』。その中にリナに教えた水の矢の魔法も入っていた。でも、属性ごとに決まった形があつてそれ以外は使用できないらしい。

……これはリナに昨日教えたんだよなあ。……僕、教えてばっかりだ。面倒事がどんどん増える……

そんなことを考えながら本に目を通す。

とりあえず、いくつか火の攻撃魔法の詠唱を覚えて、午後の魔法練習のときに使えるようにとメモをとった。

途中で集中が切れたけどしょうがないと思い、僕は寝ている3人

を起こして教室に戻った。

調べ物 【TAKUMI】（後書き）

ああ……通常魔法多い。

使えたらいいなあと思うもの十魔法と言ったらこれだろうというものをあげていき、文章にすることができた物だけかきました。

そういえばリナちゃんのルームメイトを紹介していなかったのだから次回紹介と思います。

原因は……
【RINA】（前書き）

リナちゃんとタクミ君の間に変な空気が……

どうぞ!!

原因は……【RINA】

タクミ君から読むようになって言われた本を夜に読破したのが間違
いだった……と心の中で、てかもうほとんど意識もない状態なんだ
けどそんな状態でも後悔した。

無論、先生のお話も頭に入らない。

「——というわけだ。これで今日の歴史の授業は終わりだ」

「きりーっ」

やる気のない学級委員の『ラウス・メイ』の声でクラスメイト達
が立ち上がる。わたしもふらふらしながら立ち上がった。

「れーい」

「ありがとうございます」

世界史の先生が教室を出ると教室は一気に騒がしくなる。でも、
正直わたしは騒ぐほどの元気が……

「あの、大丈夫ですか？リナさん。顔色悪いですよ？」

そんな私を気にしてくれたのか声をかけてきたのは寮のルームメ
イトの『エリス・プレリア』。この子はほんとに可愛くて、頭もい
い。この子はわたしと同じ年だけどなんか同年に見えない。

淡い金髪にエメラルドみたいな大きな目。茶色の丈の短いジャケ
ット、白の太ももくらいまで長さがあるTシャツに水色のミニスカ
ート。足にはハイソックスに可愛いリボンが付いた靴を履いている。

その上にグレーの学校指定のローブを羽織っていて、大人っぽく見える。

ちなみに学校指定のローブは学年……っていうか年齢？ごとに色が違う。13歳〜15歳は白。16歳〜18歳はグレー。19歳〜20歳は紺、という具合。一応ここ、騎士学校だから実践訓練とかのときに体を守るために着たりする。

「うー……大丈夫じゃないかもお……」

「徹夜であんな分厚い本読破しましたからねえ……しかもノートに魔法の詠唱とか出し方とか写したり……」

「……馬鹿でしょ」

タクミ君がさらっと黒板を見たまま口を開いた。

その言葉かなり痛いよお……タクミ君、ひどい。エリスの優しさが一気に崩れて行くよお……

「あのさ、こっちだってあんな分厚い本読むのにかなり苦労したんだからさ……」

「……あれくらいの本、重要どころだけ抜き出せば、何ともないでしょ？」

そのタクミ君の言葉にちょっとイラついた。

「タクミ君とは頭の作りが違うの……!」

そう言い捨ててわたしは机に突っ伏す。

もう、眠くて眠くてしょうがない。でも、わたしはタクミ君の気配が変わったことに眉をひそめた。

——タクミ君の気配……ていうか心の中が妙に冷たく、いつも以上に孤独感が広がって行くのを感じた。

ちなみにわたしは通常魔法の応用術、思考魔法と本に書いてあった感情解読術が使える見たい。あと浮遊魔法かな？

で、話を戻して……どうしたんだろう、タクミ君。何だか様子がおかしい。

「どうしたのタクミ君？なんでそんなに——」

「……」

タクミ君はそのまま冷たい仮面をかぶったまま教室を出て行ってしまった。……わたし、何か悪いこと言った……？

ちよい待った。え、ええ……

「ちょっと、リナ・クーレス!!」

そうわたしの名前を教室中に響き渡るくらい大声で呼んだのはリランだった。

うわあ、こっちはまた怒ってるよお……なんでこんな面倒事に巻き込まれなきゃいけないわけ？

てかほら、またクラスの子たちが廊下に逃げてるじゃん。あなたはトラブルメーカーですか？それとも女王様ですか？そんなことを思いつつため息をついた。

「なに？リラン」

さっさと話を切り上げたいのでわたしはリランを見ずに立ち上がり、外を見た。その時エリスは空気を読んだのかすうーっと自分の席に音も立てずに戻って行く。

……エリス、助けて。絶対わたし一人じゃ無理だよ、この子の対応。

「タクミに何言ったの！？アンタ、何か言ったでしょ！？」

「それは――」

また、ビシィとわたしに指を突き付ける。

今度は何を要求してくるの、リランさん？

体が『面倒事』を拒絶するように微妙にリランとの距離を置こうとする。体は正直って言うよね。マジで助けてほしい。

「私にあんたに決闘を申し込む！！」

「えええ！？なにそれ！？こっちはまだ魔法だつてろくに使えないのに！？」

「そんなの関係ないわ！！そうね、明日、実践訓練があるわ。その相手をあなたに決定する！！」

「ええええええ！？ちょ、ちょ、ちょい待った。キミ絶対わたしに勝てるでしょ、その実践訓練！」

「聞く耳持たずよ！！あんたになんか負けないんだから！！」

「ちょい待ちなさい！！てか人の話聞けえええ！！」

言いたいこと言ってさっさと出てくってどういふことですかリランさん!?

明日、わたし、この17年の命に終止符を打つような気がする……タクミ君の事もそうだけど、わたし、何か悪いことしたわけ!? マジ、もう助けてほしい……でも、生憎タクミ君はいないし、ヴェルは女の子を口説きに行ったし、マリク兄妹はクラス違うし………覚えてた魔法で何とかなるといいけど……と心の中で思ってたしは力が抜けたように椅子にストンと座った。

リランのライバル視はいつになったら治るのか……この子はヴェルよりたちが悪いと思うのはわたしだけじゃないはずだと感じた瞬間だった。

原因は……
【RINA】（後書き）

リナちゃん、リランちゃんに宣戦布告を受けてしまいましたね。この話を考えているとき某ゲームの少女たちを思い出しました。

「アリ○ツタはア○スに決闘を申し込む!!」

懐かしい……

孤独？ **【TAKUMI】** **(前書き)**

タクミ君の秘密が明らかに・・・！！

孤独？ 【TAKUMI】

僕は教室から逃げるようにして洗面所に向かっていた。今は、誰とも会いたくない。

正直のところ、今誰かに声をかけられるとか、話すとか、めんどくさかった。

……『めんどくさい』。これが僕の口癖みたいなもん。けど、さっきのリナの言葉は、結構きつかった。人の発言を『めんどくさい』じゃなくて、なんていうか……『悲しい』と感じたのは久しぶりっていうか、初めてだった。

『タクミ君とは頭の作りが違うの！！』

リナの言葉が何度も何度も頭の中に反芻する。

「（頭の作りだけが違うんじゃない。全てにおいて、僕は人とは違う）」

……めずらしく、自分でも驚くほどに自分が『孤独』なんだと感じた。昔から僕はいつも変わってるって言われてた。もう、慣れっこだった。けど、改めて正面から言われると結構痛いものなんだよね。

人と変わっていることなんて、僕にとっては当たり前だったから。

【僕たちの世界——日本にて。ちょっと前のこと】

「タクミ！ここ教えてほしいんだけど」

「秋宮くん、何か良い案ないかな？」

「ここどうすればちゃんとなるかな？ちょっと教えてくれない？」

……いちいちめんどくさいことが毎日毎日繰り返される。ちょっと頭がいいからってなんでも僕に頼りすぎなんだよ、みんなして。でも、そんなこと口出す方がもっとめんどくさいことになりそうだからあえて何も言わない。

「……はあ」

『面倒事』を全部終わらせてから僕は自分の席に戻ってため息をついた。僕の席は窓側の前から3番目。後ろに3人もいるからギャーギャーうるさくてしょーがないけど、視力が悪い癖に眼鏡を持っていない僕は自動的に前の方に移動することになるわけで。

そして、この教室での僕は『優等生』。正直言ってそんな肩書きじゃないんだよね。

頬杖をつきながら窓から空を見上げる。青く澄みきった空には鳥が1羽だけ飛んでいた。

「（……自由だな、あの鳥……）」

学校でもこれと言って楽しいことはない。家に帰ったところで誰がいるわけでもない。

……まあ、家の状態は両親もいない、兄弟もいない。つまり一人暮らし。てか、両親に至っては顔を見たことすらない。僕が小さい時に死んだってしか聞かなかった。

兄弟は兄貴がいたけど兄貴はすでに22歳。家にいるはずもなく、

僕は必然的に1人では大きすぎる家に住むことになった。(まあ、一戸建てに1人だからね。)

「(……さっさと家に帰ろう)」

学校にいたって友達がいるわけでもないし、みんなからの『面倒事』に付き合っているのもいやだから、学校が終わると同時にまっすぐ家に向かった。

「(家でも1人……か)」

『ただいま』と言っても返事があるわけではなく、僕は1人、ソファーに寝転がった。

何の音も聞こえない。僕の呼吸以外何も。

僕は『孤独』なんだ。悲しいわけじゃない。僕にとって1人でいることは『面倒事』が起きなくてとても居心地がいいから。

だから、僕は他人とは違う。みんな家族がいない。友達がいらない。他の優等生からはかなり怖い存在……らしい。なんでかは知らないけど。とりあえず、変わっている高校生ってことだけだ。結論的に。

【とまあ、現在に戻る】

そんな感じで僕は『孤独』が嫌いなわけではなかったのに、今は

その『孤独』から逃れようとしている。……僕の今の感情はかなり『めんどくさい』なあ。

とりあえず、気持ちを切り替えるべく僕は顔を洗ってから廊下の窓を開けて風を受けていた。

……まあ、1人でこんなことやってるやつは大体話しかけづらいオーラを放ってるから誰も近寄らなくてラッキーなんだけど。そんなことを考えているとき。

「あれ、タクミ？」

げ、この声は……

「何してんの？ぼーっとしちゃって」

僕が苦手とする女の子の声に洩々振り返るとやっぱり——リランがいた。

「……何でもない。疲れただけ」

「ちょ！？なんで逃げるのよ！！」

うん。あの人はギャーギャーうるさいからここは逃げるに限る。ダッシュでヴェルがいると思われる教室に向かった。

——今の時間なら、アイツ、ナンパしてるだろうから止めさせないで。

この後、エリスから聞いて知ったんだけど、さっき僕がリランか

ら逃げたせいでリナが決闘を受けてしまったらしい。

……マジでごめんなさい。リナ。

孤独？ 【TAKUMI】（後書き）

タクミ君の過去について……

こちらの世界ではタクミ君は自分と他人は違うと認識しています。
家でも1人+めんどくさがり屋なので無口になったんでしょうね（
笑）

決闘 【RINA】 (前書き)

リナの魔法の腕はいかに……！

どうぞ！

決闘【RINA】

なんでここにいるんでしょうね、わたしは。

昨日、リランから決闘を受けちゃって、慌ててタクミ君たちに頼みこんで魔法を教えてもらって、大変だった……って待てよ……今の状況、

「（もう実践訓練じゃん!!）」

わたしは心の中だけで頭を抱えた。

状況は実践訓練のためクラス全員でグラウンド……に來ています。で、わたしの目の前に小型の短剣を握るリランが、すずしい顔でわたしを睨みつけております。

一方わたしはと言いますと、まだまだレベルが低いので剣は使えない……つまりは杖を持っているのです。まあ、この杖はかなりの強度で作られていて――

ちよい待てや。

……ふざけんなあああああ!!

「杖と剣って剣の方が有利だね!? そっちも杖にするとかしないんですか!？」

「うるさいわねっ!! あたしが勝てればそれでいいのよ!! ……大丈夫、安心して? 殺しはしないから」

そう言って微笑むリラン。……笑顔が黒い。いや、どす黒い。

うっわ……何この人。顔に似合わず性格黒……殺されはしなくても早く終わらせないと、半殺しにされるかも……いや、瀕死状態?

「そろそろ試合始めるぞー相手見つかったかー？」

担任の先生が声を張ってクラス全員を見回した。

第1試合目の組、3組が同時に試合を行う。

わたしも第1試合目なので、もう位置に着いていた。他のクラスメイトは陸上競技場みたいになっているこのグラウンドの観客席？みたいなところに座ってこちらを見ている。

他の組は男子の組と女子の組。どちらもまだ剣が扱えないレベルなのか杖を握っている。

……レベル差あんのわたしの組だけじゃん。

「よーし。始めるぞー始め!!」

担任の先生の合図とともに、試合が始まった。

「(どう来る!? 魔法で来ることはないと思うけど……)」

わたしは掌に汗を握り、バクバクとうるさい心臓を上から押し付けるようにして胸に手を当てる。

落ち着けー落ち着けー……平常心、平常心……

そんなことをしている間にいつの間にかリランは2メートルくらいのところまで来ていた。

「ってりゃあ!!」

「っつ!!」

リランは持っている短剣をわたしの腕めがけて振りかざしてきた!! ところで体が自然に反応して右に避けて受け流す。

飛びながら振りかざしてきたもんだからリランはそのまま攻撃を加えることができず、わたしがもともといた場所より少し後ろに着地した。

うわあ、普通に本気じゃん。絶対殺される。

「へえ、反射神経、随分いいのね。ビックリしちゃったわ」

「……お褒めの言葉、あーりーがーとー」

正直言つてこの子、『守る』ということは頭にはないみたい。さっきの攻撃も、わたしが動きを読んでいればリランの後ろから杖で殴るとか、蹴るとか……まあ、隙が多いってこと。

わたしは杖で殴ってもそんなに効果がないことは分かっているの
で、とりあえず。

「『世界の力の源よ、我に力を貸せ。敵を貫く剣とかせ!!』」

杖を持つ右腕をまっすぐと前に延ばし杖は魔法石が付いている方を空へと向けて左手は胸の前に置いた。これがわたしの場合の魔法発動フォームかな？

「魔法……よね？でもこの魔法、リナが使えるような魔法じゃ……」

リランが驚きに目を瞠るのがここからでもわかる。

こっちに来て分かったことなんだけど随分と身体能力十五感がめっちゃ上がっているの
で小さい呟きも注意して聞いていればちゃんと聞こえます。視力も2.0以上あるでしょって思うくらい見えるし。……実際そうなのかもしれないけど。

そんなことを考えている間に魔力が形になった。形は――何本もの魔力でできた小さいクナイみたいなナイフ。

「……発動せよっ!!」

そう言ってわたしは左手を振り払うようにして魔法を発動させた。
この魔法は魔力の剣で相手を貫く魔法。……まあ、普通の剣じゃないから死にはしないけどそれなりに痛いはず。

さっさと終わらせたいので躊躇いはない。
けど。

「『わが身を守れ!! 魔力の盾よ!! 盾!!』」
バリアー

リランの言葉と同時に魔力の盾がリランの前に発動し、わたしの魔法を防いだ。

そりゃそうだね。リランだって守護魔法くらい使えるか。

「アンタ、一体……」

魔法で全て防ぎきってからリランは油断なく剣を構えてこっちに走ってきた。

「(さーて、どうしようかな……)」

守護魔法は魔法全般を防ぐ魔法のこと。攻撃魔法は相当強い魔法じゃないと貫くことはできない、まあ、早く終わらせたいわたしにとっては邪魔な魔法かな。

「(あ、いいこと思いついた)」

わたしはピーン☆とひらめき、また杖を構えた。

「この距離なのに『魔法を使おう』なんて考えが甘いんじゃない！
」

「……どーでしょうねえ？」

あくまで顔はにこやかにして、頭の中に光をイメージした。しかも物凄くまぶしいやつ。

そんなことをしている間にもリランはわたしの肩か腕をめがけて今度は剣を突き付けてきた。今回は飛ばずに位置が定まるように走ったまま。

「……行くよ？」

静かに呟いてわたしは今回は杖を振り上げる。それと同時に閃光弾みたいな物凄くまぶしい光がわたしとリランの間に爆発するように広がった。

わたしの狙いはこれ。

「くっ……目が……」

やっぱり。リランは急に光を目の前で見たから目が見えなくて動きも止まる。わたしは自分の魔法だから何ともない。っていうのが狙いで見事に的中。

光のせいでわたしたちの姿は確認できないのかクラスメイト達のざわめきがここまで聞こえる。

光が晴れるころ、やっと目が見えるようになったのかリランがわたしの姿を探すように首を動かす。

そこで、リランの動きは止まった。

「これで、終わりだよ？」

わたしはリランの後ろから魔力を鋭くさせて作ったクナイみたいなのを左手に握ってリランの喉元に突き付けていた。しかも右手の杖でリランの動きを拘束？しながら。

我ながらいい考えだったなあ……実際、これやっていなかったらずっとずるずる試合してたと思うし。

「それ以上動くと、もっと喉に刃が刺さるよ？」

わたしの言葉通り、さっきいきなりリランが首を動かしたもんだから少しだけ皮膚が切れて血がプツクラと出ていた。

わたしだって自分の感情と行動にビツクリしすぎて動けないんだからこれ以上あなたに動かれると困るんです。もっと大量の血を見るなんてごめんだし。

「……わかったわ。降参する」

「第3組、試合終了!!」

リランの声をいち早く聞きつけた先生がそう声を張った。その合図にわたしは剣を消してリランから離れる。

ふう。よかったよかった。降参してくれて。

わたしが離れるとリランはわたしを振り返った。

「アンタってすごいね」

リランが黒い……あ、違う。今は白い？違うなあ。優しい笑顔でそう言った時。

——わたしはリランの肩越しに火のボール……だから火の攻撃魔法がこっちに向かって飛んでくるのを見て、リランを押し倒した。

「なー!!……いきなりなにすん——」

リランの言葉はわたしの肩越しに見えたのだろう火の魔法を見て止まった。

うん。ついでに動きも止まったから助かった。わたしのローブ、少し焦げくさいもんなあ。ちよつとでも押し返されたら危なかったかも。

「ふう……わたし今日1日で寿命が絶対縮んだ……」

「あ、アンタ……」

驚くリランの上からどけてわたしは立ち上がってリランに手を貸した。

リランって軽いなあ。全然重くないや。いいなあ……
そんなことを考えているとリランが眉をひそめたのでわたしは首をかしげた。

「なんで、助けたの？」

「へ？」

「アンタの事をあれだけひどい扱いして……それなのにどうして？」

あー。確かに酷いことされてましたねえ、いろいろと。
気にはしたてけど根に持つタイプじゃないからなあ……

「えー……危なかったから。それだけ」

ほんとは目の前で魔法食らって倒れる人を見たくないからなんだけど……んなの見たら立ち直れなさそうだし。

「そう……あ、あ、ありがと……リナ・クレース」

「どーいたしました。リラン」

おーリランってツンデレなんだあ……

そんなことを思いながら握手を交わす。とりあえず、ライバル視はされなくなったのかな？

この子は根はいい子だし、仲良くなれそう。

試合が終わって、わたしの心にはかすかな恐怖と魔法を使えるのだという喜びが入り混じっていた。

……これで面倒事が減ればいいけど……

決闘【RINA】（後書き）

リランちゃんがようやく暴走を止めてくれました。

最近更新が遅いですが、気長に見てやってください m (m

面倒だけど…… **【TAKUMI】**（前書き）

タクミ君の『面倒事フラグ』は一体どうなるんでしょうね？

どうぞー！！

面倒だけど…… 【TAKUMI】

なぜか僕らの学年はグラウンドに集められています。理由？しらないよ……

内心ため息をつきながら立っていると校長先生がいきなりしゃべりだした。

「えー生徒諸君。君たちには来週『帝都サーリスト』の城に招待された。ということで来週、城の見学に行ってもらおう」

「「「ええええ！？」」」

生徒たちがあちらこちらで悲鳴とかなんか妙にはしゃいだ声をあげている。……もちろん隣にいるヴェルも。

「タクミ聞いたか！？帝都だってさ！！本物の魔法騎士がいるんだぜ！！」

ヴェル、うるさい……僕の腕つかんで振り回さないでよ。う、腕が……

「……興奮しすぎ。帝都に行っただくらいで騎士になれるわけじゃあるまいし……」

僕がそう言ってため息をつく。

「タクミ……！お城だよお！！お姫様いるんだよお！！」

……ティナがヴェルに掴まれていないほうの腕をヴェルより強く

振り回してくる……う、腕。腕がちぎれる……

「違うよティナ。城には王子がいるんだよ」

ティト。そこは冷静に突っ込むところじゃない。妹さんを何とかしてくれ。

生徒たちがざわざわとしていると校長先生が咳払いをした。それで静かになる生徒。……ただけありがちなシーンなんだ、ここは……

「だが、この大人数で行くわけにもいかない。職員で行く生徒を推薦した。では、発表するぞ？」

そんなことを言いながら校長先生はごそごとスーツのポケットをあさる。下を向いているから帽子がずり落ちそうになったけど左手で帽子を押さえながらポケットの中を探している。

……きつとツルツルピカーン☆……なんだろうな……うん。今僕、キヤラ壊れた。

まあいいとして……見つけたのかポケットから紙を取り出して校長先生は生徒の名前を呼び始める。

どーせ呼ばれないだろうしいいや……

「タクミ！」

急に僕の名前が挙がった。……って、え？

「（帝都に行くはめになった……!）」

なんでいつもいつもこんな面倒なことに付き合わされないとなら
ないのか……

僕は心の中で頭を抱えた。

……フツウに暮らしたいんだけどなあ。僕。てか帰りたい。

「リナ・クーレス！……ヴェル・ローリア！」

「わ、わたし……？って、ええええ！？」

「よっしゃ！オレも呼ばれた！！」

悲鳴を上げるリナと大喜びのヴェル。……リナも行くの嫌だったんだな。

「最後！マリク兄妹！」

「わぁ！！呼ばれたねーティト！」

「僕たちの帝都に行けるんだね！！」

そう言って顔を見合わせる双子。……あれ？このメンツ、いつものメンツじゃん。

ってことは……？

「（僕、また損な役回りだ……）」

……もういいよ。諦めたよ。帝都に行って騎士に捕まっても僕は知らない。これ以上面倒事フラグを増やしたくないし。

「以上の生徒を『帝都サーリスト』への研修生徒にする！！」

校長先生が胸を張ってそう言い終わると一気にざわめきだした。

やっぱり周りはクラスで頭のいい人ばかり。どうしてヴェルとテナが呼ばれたのか……

「タクミひどいよお！わたしそんなにバカじゃないよ！！」

「まだバカだとまでは思ってたかった」

忘れてた……テナは思考魔術が使えるんだった。……迂闊にいろいろ言えないなあ。

ヴェルは浮かれて他のクラス的女子に自慢しに行ってるし。……アイツはまあ、魔法も通常魔法しか使えないからなあ。応用は浮遊魔術しか使えないし。問題はないかな。

って問題大有りじゃん。

「（帝都に行けば、人も多いし、異世界人ってばれるかもしれない……）」

そう考えてギャーギャー騒いでる4人をしり目に僕は顎に手を当てた。

……けど、もしかしたら何か分かるかもしれないし……リスクは高いけど行ってみるのも……いいかもしれないな。

まあそんなこんなで寮に帰ってからヴェルが興奮しすぎて隣とか上の階のクラスメイトたちから苦情が来たのは無理もない……よね。

面倒だけど…… **【TAKUMI】**（後書き）

帝都ですよ！帝都！！

……さーて続きを考えましょうか（まだ決めていません＜＜）

心配……
【RINA】(前書き)

さーて！久々の更新です！

どうぞ！

気配……【RINA】

「帝都かぁ……」

小さく呟いて、ため息をつく。

正直言って今は授業どころじゃないし。なんでって？そりゃあ……

「（今週行くんだよね、帝都に……）」

それを考えてまたため息。

……なんでわざわざ帝都まで行かなくちゃなんないわけ？こっちに来てかなり面倒なことが多すぎる気がするよ？うん。

しかもまだ魔法だって少ししか使えないし……

タクミ君は「何か分かるかもしれないし」とか言ってたけど、いかにも「問題ありますよ」的な響きしてる場所に行かなくちゃいけないなんて……自殺行為だよ。

そんなことを考えながらペン回しをしていると。

「ん……このクラスからも研修生が何人からいるからぁ、今日はここまでにしよっか♪」

「「「ええええ!!」」」

おとぼけ発言をかましたこの先生は『マナ先生』。さすがのわたしも先生を見る。ほら先生、生徒から非難の声が上がってますよ？

「研修生って言ったって3人しかいないですよ!？その3人のためだけに授業を遅らせるんですか!？」

「えー？だってもう教えることないんだもん」

そう言っって唇を尖らせる先生。……とてもじゃありませんが24歳には見えません。褒め言葉ですよ？怒らないでくださいね先生。

「というわけで今日の授業は終わり！」

強引に授業を終わらせて先生は小走りに職員室へ戻って行った……なんてマイペースな人なんだ、先生よ。

……ああ、痛いよー周りのみんなの視線が痛いよー……
クラスメイトの視線がかなり気になるので、窓を外を見るとエリスが声をかけてきた。

「リナさん、ちょっといいですか？」

「うん？何？」

「ここ、教えてほしいのですが……いいですか？」

「え？あ、うん。いいよ」

いつの間にかわたし教える立場になってるし……異世界こゝちにきてまだ2週間しかたってないのに……なんか、変な感じ。

まあ、もうすぐ学校も終わるし、今日は早めに寮に戻ろう。疲れたしね、いろいろと……

エリスのお礼の言葉を聞きながらわたしはそんなことを考えていた。

今わたしは寮に戻っております。

「さてと……勉強しゅくりよ」

グツと背伸びをして机のランプを消す。いつの間にか外は真っ暗で思わず窓の外を見た。

エリスは今日友達と外でご飯食べてくるって言ってたっけ？わたしも早くご飯食べちゃおう……

さっさとご飯を炊いて野菜をざく切りに切る。大雑把だけど簡単でいいんだよね、『野菜炒め』。

「(大丈夫かな、ユナは……)」

料理しながらふと妹の姿が頭の中をよぎった。

……タクミ君との話を合わせると、日本^{あっち}ではわたしたちの影ができてるかもしれないって話だし……わたしがなくなったことにはなっていないはず。しかも異世界^{こっち}での一ヶ月は日本^{あっち}での一日らしいから日本^{あっち}ではまだ家に帰ってない時間だろうし……

……できれば家に帰りたいけど、そうもいかないもんね。……はあ。

色々考えながら手だけは動かしてたけどたぶんここに鏡があったら魂抜けたような顔してるんだろうなあ……想像すると笑える。

「よし、できた」

一人で呟いてテーブルに晩ご飯を置く。カタン、と音をたてて食器が鳴った。

もうお腹がすいたよお……さて、わたしも食べますか。

「いただきます」

手を合わせて箸をとる。一人で食べるのって久しぶりだな。なんか寂しいかも……

まあ、冷たいご飯がテーブルにドンって置いてあるわけじゃないからまだましか。

ぱくぱくご飯を食べながらぼーっと考え事していると急に背筋が冷たくなった。……ものすごく嫌な感じの気配。

気配を感じ取ることはわたしたちの世界でもなぜか使えた能力？
っていうのかな。でも今考えてみるとそれって魔法を一種だよね。

「……？」

気配がした方へ視線を巡らせるとその方向は窓の外だった。

外にはこの町の夜景と星が見えるだけ。アクトリスここは高台にある学校の寮だからそのほかには何も見えないし、ましてや2階のこの部屋を覗くなんてこの時間帯では無理。暗いし。

……その気配は殺気まじりの、それでいて楽しげな変な気配。でもわたしが窓の外を見た瞬間にその気配は消えた。

……嫌な予感がするなあ……しかも絶対殺気だよね、さっきの。
……ダジャレじゃないよ。

もし本当に殺気だったら、わたし、狙われてる？……うわあ、笑えないわあ。

「（深く考えないようにしよう……）」

余計なことを考えてるだけ無駄だし、カーテンを閉めてわたしは一人もぐもぐとご飯を食べていた。

余計なことに巻き込まれそうだと食器を片づけながらわたしは思った。

気配…… **【RINA】**（後書き）

リナの感じた気配とは……！？

まあその正体を明かすまでしばらくかかりそうですが……（――ω――）

リョウの考え……？ **【TAKUMI】**（前書き）

しばらく更新しておりませんでした！！

では、14話、どうぞ！！

リョウの考え……？

【TAKUMI】

今日は遂に帝都に向かう日。僕は内心めんどくさいなあと思いつながら渋々他の研修生と共に歩き出した。

「……」

今、僕は帝都に向かうためにでん……違う。蒸気機関車に乗っております。うん。蒸気機関車だからすつごくいろんな音が聞こえます。何せ窓側だからね。

その小さい窓から見えるこの世界の海を頬杖をつきながら眺めてみる。海は青くて、僕がたまに通っていた海なんかよりもずっと綺麗で……沖縄の海みたいだった。

「ねえティト？ここってなあに？」

「え……ああ、イメージだよ、イメージ！！通常魔法よりも強くイメージして呪文を唱えると形ができるんだよ」

ティナが示した本の文章を読んでティトはそう説明する。……この二人は仲いいなあ。もちろん座席は隣。窓側から リナ―ティナ―ティト って座っていた。ちなみに僕の隣はヴェル。

ええ。僕はまたこのメンツと一緒にですよ。

そんな感じで特に何を考えるわけでもなくぼーっとしていると急にヴェルが少しだけ驚いたような顔をしてテイトを見つめた。

「へえ……なんだガキンチョ。勉強したのか？」

「ガキンチョじゃない！！ヴェルと一つしか変わらないじゃないか！！」

「ほ、ほら、静かにして……」

また始まった。このメンツと組むとこうなるから嫌なんだよ……そうは言ってもせっかくできた『友達』ってやつだし、ここは我慢しよう……ああ、音楽でも聞きたい。

そんなことを思いながらぼーっと流れて行く景色に目をやっていると急に頭に影が落ちて、それと同時に聞き覚えのある声が降ってきた。

「あれ、タクミも研修生だったのか？」

僕に声をかけてきたのはリョウだった。僕は「まあ」と言っておりヨウを顔を見上げた。どうやら僕の座席の後ろだったらしい。でも、ここにいるってことはリョウは頭いいんだな。……けど普段の姿見てたらただの変人だよなあ……毎日のように分厚い本を何冊も借りては一日で読んでくるんだもんな。僕だってそんなことはしないし。

「あれ？この人たち、タクミの友達？」

「おう！オレはタクミのしんゆ「違う」つめてーなー……」

ヴェルに言われる前に断言する。『友達』とは認めてもいいけど『親友』とは認めてないし。てか、こんなやつと親友だったら身が持たないと思うし。

「はじめまして」

そんな僕たちのやり取りは完ぺきに無視してリナに笑顔を振りまくりヨウ。……コイツ、第一印象よくしようとしてやがる。

え？ 思考魔法は使えないけど読心術は使えるんだよね、僕。さっきリヨウの心を読んだら『メンドクサイ』って見えたからそーゆー結論に導いたわけであって別に不思議でもなんでもないよ。

「ねえリヨウはお城で何したい？」

どうやらリヨウはティナたちとは知り合いらしい。ティナの質問に「そーだなあ」と言って顎に手を当てて考えるリヨウ。

……とりあえず、僕の座席の上で考えるのやめてくれないかな？ 影で暗くなるし、人の気配でかなり気が散る。

……コイツ、何考えてるんだかわかんないな。なんかすっごく楽しげだし。顔が黒い笑みでとんでもないことになってるぞ、リヨウ。リヨウが答えを出すまでしーんとなる。聞こえるのはガタンガタンという音と、ポーポーと、機関車が蒸気を出す音だけ。しばらくしてリヨウは口を開いた。

「……王子を殺す？」

「「「はあ？」」」

……いきなり何言い出すんだコイツは。僕はため息交じりに首を

振る。ティナと言うときよんととして大きな目を瞬いた。

……さっきの「はぁ？」はそれ以外です。

「つて言うのはじょーだん♪」

リヨウはニヤニヤと笑いながら右手の人差し指をたてて言った。

……いや、絶対コイツ半分本気だったぞ。顔見りゃわかる。魔術なんて使わなくても。

それを聞いてキレたのかヴェルが持っていた雑誌を丸めて

「アホか!!」

と、リヨウの頭をすごい勢いで打った。その反動でリヨウが僕の方に落ちてくる。

つて。

ええええ!

僕は頭に降ってきたリヨウをかわそうと座席の少し前に座ったのに、その後ろにリヨウが落ちてきたもんだから二人揃って前につんのめる形になってしまった。

で。

「……っ／／／／／」

目を開いた瞬間目の前にあったのはリナの顔。その顔はかなり驚いたのか目は見開かれ、顔はなんでか知らないけど赤かった。

つて、この距離、何？リナが座っている座席の背もたれに僕の両

手はあって、リナを覆うようになっていた。僕の腕がカクンってなったら頭がぶつかってしまいそうな距離。

「ごめん、どこか叩いた？」

「う、ううん！ きゅ、急にこっちに来たからビックリしちゃって……」

慌てて顔をそらすリナに一応謝罪して離れる。おして僕の後ろでリヨウが「いたたた」と呟くの聞こえて僕は振り返った。

「……クリーンヒットだったよ、その打ち方」

「わ、わりい……」

リヨウは僕の座っていた座席に頭を預けて座席と座席の間の床に座って頭をさすった。

頭から落ちてきたからそのままグルンと回転してこんな姿勢になったのかあ。

急にリヨウが前の座席に落ちたことに驚いたのかリヨウと一緒に座っていた生徒たちと、周りに座っていた他のクラス生徒が何事かと見に来た。

……皆さん。これは見せ物じゃありませんよー

帝都に行く前に僕はいきなり嫌な予感がしてならなかった。てか、ヴェル……アイツ帝都に着いたら一発殴ろう。うん。

リョウの考え……？ **【TAKUMI】**（後書き）

今日はエイプリルフール！！ってことでリョウはいい役になってくれました（笑）

でわ、また後日！！

帝都【RINA】(前書き)

さてさて帝都に到着!!

帝都【RINA】

しばらく蒸気機関車に揺られること2時間。新幹線ならこんなに時間はかかんないんだろうけど（なんたって東京から静岡に行くくらの距離）こっちの世界はそんなものないし……仕方ないか。

「あ！ほら、帝都見えてきたよ！」

ティトがそう言って窓の外を指差す。その方向をわたしも見ただ。あ、ほんとだ。大きな街……みたいなのが見える。おーでっかいでっかい。

周りは高い壁で覆われていて中は見えないけど、その壁の向こう側にお城みたいなのが少しだけ見える。

でも、やっぱり異世界なんだなあ……街と街がくっついてるんじゃないかって全部ばらばらで、しかも王制。それにしても王子かあ……やっぱ金髪で目は青？あれ、それじゃあヴェルとそんなに大差ないじゃん。

「……な、リナ」

「へ？ああ！！な、何？なんか変な顔してた！？」

「……もう、降りるって」

タクミ君の言葉通り、もうみんなが降りはじめていた。って、いつの間に着いたの！？

「早く、行こう」

「あ、ちょ！待ってたらー！！」

荷物がなんか多くなっちゃったわたしは慌ててバッグを持って外に出た。

外の空気はちょっと冷たかったようにも感じるけどまあそこは汽車の中の人口密度が高かったただだね。

「……さて、と」

タクミ君が隣で小さく呟いて……ヴェルの後ろに行く——

ドガ☆

「つてえ！！何すんだタクミ！！」

「うるさい。さっきかなり迷惑被ったんだからそれくらい我慢しろ」

「んなこと言ってたってなかなかの力だったよな今の！？」

「知らないね」

うわー。しらばっくれた。まあ、ヴェルのせいでわたしたちの周りはずっとうるさかったもんね。ティナたちはあつという間に友達作っちゃってキャツキャツしてたし……

タクミ君が怒るのも分かるよね……タクミ君だし。

「さてと……これから帝都の中にはいるが入国審査をしなければならぬのは知ってるな？くれぐれも騎士たちの目につくようなことはしてくれるなよ？学校の恥になる」

「「「はい」」」

約四十人くらいの生徒が学校で教わった騎士の敬礼をする。ああ……まあわたしもなんだけど。

そんなこんなで全員入国審査を無事終えて帝都の中に入ったんだけど、なんかいきなり「帝都の中をみて来い」とかってぺい☆って放り出されました。え？さっきのは効果音ですが？
で……いつものメンツと一緒に訳だけど……

「この行列……何？」

「あれ、知らないのかいお譲ちゃん。これから王子御一行が通るらしいよ」

「へえ……そうなんですか」

近くにいたおぼさんがそう教えてくれた。へえ、これからねえ……パレードじゃん。それを聞いた瞬間タクミ君がはあ、とため息をついた。タクミ君の心の中を見ると『メンドクサイ』。……やっばりか。

そんなことをしているとティナがびよんぴよんと飛び跳ね始めた。

「どうしたのティナ？」

「んー……わたしの身長じゃあ見えないなあ……って」

あ、そっか……ティナの身長じゃあ周りの大人たちの身長が大きすぎて見えないんだ……

するとティトがティナの頭をぽんぽんと優しく叩きながらいたずらっぽい笑顔になった。

「じゃあ僕が肩車してあげよっか？」

「えー……／＼／＼いいよお恥ずかしいもん」

「僕に任せなさい☆」

「やだぁ!!」

ティナがいよいよやと首を思いっきり振ったもんだからさすがにティトも諦めたみたい。

なんだこのバカップル。双子なのになんか……いやいや……カップルだ! うん。認めよう。

そんなことをしている双子の隣でヴェルが不満そうに唇を尖らせている。……そりゃ不満でしょうね、彼女もいないんだから。

え? わたしはいいんです。興味ないから。タクミ君はまあ、興味ないだろうしね……あ、理由が同じだ。まあいいや。

「おおおお!! 王子がいらっしゃったぞ!!」

誰かがそう叫ぶと周りの人たちが拍手と叫び声をあげた。その先を見ると物凄い人数で行進してくる団体が見える。どうやらあれが王子の一行らしい。

「お譲ちゃんたち、前に行っておいで? ここだとみえないだろ?」

「あ、ありがとうございます!!」

ありがとう!! 名も知らないさっきのおばさん!! てなわけでわたしたち五人は前の方に並んだ。前の方の列の人たちは跪いていた。わたしたちも片膝をつく。

いくら整備された道とはいえ膝をつくと痛いなあ……周りを見てもアクトリスとは全然違う。

アクトリスも綺麗なレンガ造りだけど帝都はもっと綺麗で……さつきよつと通ったけど路地裏も活気あふれた感じだった。貧富の差もそれほど感じないし。

「お。王子の登場だな」

ヴェルの言葉にわたしたちは顔をあげた。わたしが周りを見ている間にもうすぐそばまで先頭の音楽隊がきている。ってまたいつの間に!?! わたしぼーっとしてるのかなあ……

「リナ、ぼーっとしてどうしたの?」

「んー? 別に?」

「……変なの」

ティトの質問に答えたわたしにタクミ君が少しだけ微笑んだ。「なんで!?!」と怒って見たもののタクミ君は笑うだけ。……もういいや……

「あ、ほら王子様!!」

ティナがそう言って人数の多い行列の真ん中を指差した。

わたしは王子と言う人が一体のどんな人なのかと視線を巡らせた。

まさか王子と目があった瞬間次の事があるなんて思わなかったけど。

帝都 【RINA】 (後書き)

次の事ですか？まあ、タクミ視点で行った方がいいなあ。と思った次第ですよ。なのでそのことに関しては次回！！

何なんだろう……【TAKUMI】（前書き）

お久しぶりです！

更新遅くてすみませんorz

でわ、どうぞ！

何なんだろう……【TAKUMI】

なんだかやけに面倒なことになりそうだ。王子があらさまにこっち見てるし。とういうかこっちに來たし……って、は？

周りの人たちが「きゃー！」だの「わー！」だの叫んでいる。けど正直言って僕の耳には随分と遠い音にしか聞こえていない。

「（なんで僕たちの方に来て……）」

僕の思考が巡る前にその王子と呼ばれているそのヒトは僕たちの——いや、正確に言うとりナの方に歩み寄ってきた。

リナ、なにかやったのかな……？

「こんにちは、お譲さん方。魔法騎士学校の方々ですね。お話は伺っています」

王子……はリナを手を取るとそこにキスを落とす。

それを見た周りの人がさっきよりも大きな声で叫び……ってか悲鳴を上げる。たぶん女の人たちだろうけど、王子だもん……そりゃ女性なら懂れるよね。

って待てや！おいおいおい……まじでリナなんかやったの？え、相手は王子だぞ。僕たちは一般市民で——あ、違う違う……異世界人であって決して王子にかかわる機会なんてさらさらないんですが？てか王家とかかわりなんて持ちたくもないんですが？

そんな僕の考えを知ってか知らずかは知らないけど王子はリナの手を離すと僕にも手を差し伸べてきた。

王子の肩越しに見えるリナの顔は真っ赤。リングみたいだ。

僕は王子に手を差し伸べられたので逆らうわけにもいかない。顔はほぼ無表情で……内心かなり嫌だったけど顔に出したら周りで目

を光らせている兵士に連行されるからそこは普通に握手する。

そして握った手を通してテレパシーが送られてきた。

『……あなたは誰よりも魔力に溢れていますね』

『いえ、そんなことはないと思いますが……』

『いえ、鋭く、力強い魔力で溢れている。あなたでしたか、今回の優秀学校推薦者は』

『何のことでしょうか……こちらは何も聞かせていませんので……』

『そうですか。ではお気になさらずに』

『わたしからもお伺いしたいことがあるのですが、よろしいですか
王子』

僕の魔力がどーのこーのならリナの事も見抜いているかもしれない。
僕はそんなことを思いながらテレパシーを送る。え、やきもち？
何ソレ？

『彼女にはなぜ……あんなことを？』

『え？ 美しい方だなあと』

それを聞いて僕は静かにほほ笑みながら手を離れた。離してしまえば僕の考えが相手にばれるなんてことはそうそうできないはず。

「（リナも厄介なのに目をつけられたな……利用されなければいい

んだけど」

王子の団体がさってからもう大変だった。

ヴェルの小言、ティナのはしぎ声、ティトの質問攻め、市民たちからのいたーい視線。僕ら五人は逃げるように広場を後にした。

僕たちはちょっとした公園に足を運び、時間を潰している。

あれだけの市民に目をつけられちゃあそこには居づらいから。

僕が深いため息を落とすとティナが興奮しながら両腕をぶんと上下に振った。

「リナあ！王子様カッコよかったね」

確かに。王子は僕よりも一つか二つは年上だと思う。でもどこかあどけなく、華奢な体つきも女性かと思ってしまう。ヴェルよりも淡い金髪で髪は長く、それをリナ同様ポニーテールにしていた。

服装も市民とは全く違う。一見すると豪華だけどどこか質素なところも魅力だ。市民から慕われているというのも分からはない。

「リナ、気に入られたのかもね」

ティトの言葉にリナがあからさまに動揺した。まあ、あんなことされればねえ……

やっぱどっか違うんだよね……日本であんなことしたらビックリされるどころか引かれるけど、ここは何の躊躇もなくやっちゃうんだもんね……僕には理解できない。

「タクミ、気に入らねえのか？」

「何が？」

僕はヴェルの言葉に疑問形で問いかけてみた。何を言いたいんだ？ 振り返るとヴェルはベンチにどっしりと腰掛けて僕をニヤニヤと見つめていた。

対して僕はベンチとは少し離れたところにある木に背中を預けてヴェルをココロのコの字もない目で睨みつける。

ヴェルは面白そうに続けた。

「リナちゃんにあんなことされて……悔しーんでねえの？」

「え、どういことお？」

げ、聞いていたのかティナ！ こーゆー話になるとティナは異常なほど興味を示す。だからそれだけに厄介だった。

「別に。僕とリナはそーゆー関係じゃないって知ってるでしょ？ ……僕には関係ないね」

「ふーん……それにしても気にしてるよな、さっきから」

くっそ……なんだよこいつ。いちいちニヤニヤしやがって……僕に感情はない。極度なほどの事がないと僕は感情を顔に出すこともしないし、ましてや誰かを気にかけるなんてやったこともない……はず。

けど……

なんだろう、この胸の痛みは……締め付けられるような感覚に僕

は左手で胸のあたりを押さえ、小さく呻いた。

これが僕と彼女にとってサイアクなことにつながるなんて……思
いもしなかったけどね。

何なんだろう……【TAKUMI】（後書き）

え、話がちやごちや？

すみません！だってこれ以上はネタぐブツ…（ε（〇||（°A
。））

どうしたの？ **【RINA】**（前書き）

しばらく更新できていなかった緋花李です！
うう……また話が……

と、とりあえずどうぞ！

どうしたの？ 【RINA】

うう……もうなんなの！？異世界こせかいってあんなことも簡単にしちゃうわけ！？ってかこれからまたあの王子と会わなきゃなんないじゃん！！

で、しかもいろいろあってティナたち三人は「飲み物買ってくる」って言ってどこかに行っちゃったわけで。この公園にはタクミ君と二人つきりなんです。

うぬぬ……なんかタクミ君の目が……目がっ！！怖いんですけど……

こんな冷たい空気にはかなり弱いので恐る恐るタクミ君に近づきながら声をかけてみる。

「あの………」

「………」

「もしもし」

「……ちょっと」

「ぎゃあっ!？」

タクミ君の目の前まで来ていきなり右手をつかまれ、引っ張られて変な声が出てしまった。くっそ……不意打ち食らった……
っ……

「(顔近い!顔近い!!)」

「……あの王子に利用されないようにして。リナも魔力は十分強いんだから」

「へ？う、うん……」

耳元でささやかれるように言われて思わず心臓がバクバクする。

うう……息が……！耳に……／／／／

タクミ君はそう言うわたしを腕を離して顔をそむけてしまった。ちえ、つまんないの……

「でも、どうして？」

「……あのさ、声大きい。ここは帝都だよ。どこで誰が聴いているのかわからないのに……」

タクミ君はそう言うとき大きなため息をついて小さく首を振る。

わたしはしまったと首を巡らせて周りを見る。でも周りには木とレンガ造りのホテル？みたいな建物があるだけ。この公園は大通りから裏には行ったところにある公園だから今パレード中の大通りに人が集まっただけで、余計に人が少ない気がする。

でも、人少ないんだし、あんな至近距離で話さなくても……

「……ふう……」

「？どったの？タクミ君？」

「……っ。リナには分かんないこと」

「何ソレー！？いいもん。読心術使うから」

「!?!や、やめ……」

はい、遅いね。言葉より魔法使う方が早いもん……ってあれ？
わたしは魔法を使って珍しく慌てているタクミ君の心の中を読み取る。するとタクミ君はなぜか『不満』『嫉妬』っていう感情を抱いていた。

「?しも「黙っとけ」スイマセン」

……こわいよお……うわあ、怖いよー!! ティナ!! 早く戻ってきて!!

ティナたちが戻ってきて、わたしのテンションは少しだけ回復した。

三人の手には飲み物が握られていてそれは冷たいらしく、コップの周りには水がついていた。

ティナはわたしに駆け寄ると綺麗なコハク色の飲み物を差し出した。

「はい、アップルティーだよ♪」

「ありがとう!! ティナあ!!」

「うわあ!?! リナ、危ないよお!!」

わたしは半泣きでティナに抱きつく。うーん……この雰囲気だよ。

癒されるう……

わたしとは反対にティナはビックリして目を白黒させている。いきなり飛びついたのはまずかったかなあ？

ヴェルはそんなわたしを見てタクミ君を振り返った。

「おいおいタクミ、なんかしたのか？」

「……してないけど」

「タクミが怖いー……」

ティトはそう言ってヴェルの後ろに隠れる。そりゃね。うん。タクミ君、めっちゃ不機嫌です。まあわたしのせいなんだけど。態度ですぐわかるよ。だって腕組んでイライラしてるみたいに眉間にしわ寄せてるもん。

「……まあいいけどよ。そろそろ集合時間だぜ」

ヴェルがティトの首根っこをつかんでぺいっと投げるようにした。ティトは「おわ」と言ってお上手く着地する。すごい身のこなし。猫みたい。

それはいいとして、集合場所ってどこだったわけ？わたしは首をかしげながらティナを体から離れた。

「で、集合場所ってどこ？」

「えっとねえ、あの大通りに『ミスタリア』って雑貨屋さんがあるみたいなんだけど、そこの前だってさっきみんなが言ってたあ！」

わたしの質問にわたしを見上げながらそうティナが言った。『み

んな』と言うとさっき会ったのかな？

それを聞くとタクミ君がやっと背中を木から離して動き出す。

「……じゃあさっさと行こう。遅れると面倒だし」

「はい！」

ティトが元気よく手を挙げてティナも手を挙げた。

今は早く学校の先生方と合流して落ち着きたいな……
このメンツだと、わたしの体力がもちそうにありません。

どうしたの？ **【RINA】**（後書き）

タクミ君は掴みづらい性格ですね……

リナが不憫でしょうがない……それ以上にヴェルが不憫で……」（

＼＼、）「ヤレヤレ

旅行気分 **【TAKUMI】** **（前書き）**

更新遅くなって申し訳ありませんでした……orz

18話、なんとか完成いたしました!!

それではどうぞ!!

旅行気分 【TAKUMI】

僕たちは公園から出てティナが言ったその……えっと、『ミスタリア』だっけ？その店の前に向かってるんだけど……

まだ大通りはパレードが終わったばかりで人がたくさんいた。もちろんリナと王子の事を見ていた人はかなりいたから人によってはリナを睨むように見て歩いて行く人や、キャツキャツと隣の人と話しながら僕たちの事を指差す人もいる。

……何でいつもこうなるかなあ……目立つことは嫌だし、ましてや殺されたらどーすんだよ。

……まあそんなことはないと思うけど。

「ねえ、どこにあるの？そのお店」

リナが周りの視線を気にしながらティナにそう訊ねた。ティナは勢いよく振り返ってそしていつもの笑顔を浮かべる。

「もう少しだよ！えっとね……大通りをお城方面にまっすぐ歩いて、右側のお……えっと？」

ティナは救いを求めるようにティトの手を握りしめた。……忘れただな。ティナ。

ティトはティナを見てすぐにわかったのか握られていない右手の人差し指を立てて歩きながら説明する。

「右側の白いレンガ造りの大きな雑貨屋さん。そこの前が集合場所だよ」

「あ、そっかあ！！さすがティト♪」

「ティナはもう……忘れやすいんだから」

ティトはため息をつきながらもティナの手を離さない。……こいつら、双子なのかな？双子に見えないくらい仲良すぎなんですけど……まあいいけどさ。

そんなことを思いながら僕は周りに目をやった。いつの間にか人もだいぶ減って少しだけ静かになった。

人が多すぎてあんまに街の景色とか見れなかったけどこうしてよく見てみると綺麗だよね。

この大通りは街に入るとすぐにあるから店の種類はかなりある。武器屋、防具屋、道具屋、宿屋……旅人が最初に通る道だからこーゆー店が多いんだろうな。

「お、あそこじゃね？」

ヴェルの声に推測を消してヴェルが指差した方向を見る。確かにそこには僕たちの学校のローブを着た生徒たちがすでに集まっていたにぎやかなことになっていた。

こうしてみるとただの修学旅行じゃん。わー。何か考えてみるとずいぶん楽しいことになってるだね。

「あー……やっと着いた……」

「リナ、大丈夫？疲れてるみたいだね」

ティトが心配そうにリナを振り返ってそう聞いた。その顔は本当に心から相手を気遣っている顔。うーん、素直な少年だね、ティトは。

リナはそんなティトの気遣いがうれしかったのかさっきまでの疲

れの色はどっかに吹っ飛んでいて、顔には柔らかなな微笑みが浮かんでいた。

「うん……でも大丈夫。これから楽しくなるんだから!!」

「そーだよねえ!!」

リナの言葉にティナが嬉しそうに微笑んで元気に手を挙げた。……年相応に見えないのは僕だけか? まあ、良いんだけど……

そんなことを考えながら僕らは生徒たちの中に入ってクラスごとに……って僕らのクラスは僕も入れて三人しかないんだけど、とりあえず並んで先生から点呼を受けた。

なんでも帝都は大きいから裏の世界も結構ヤバいらしい。なんでも『黒魔術師』って言うやつらがいて、その裏の世界で何かをたくらんでいるって話だ。だからいちいち面倒な点呼をするってミーナさんが言ってた。

そんな面倒なことに巻き込まれるのはゴメンこうむりたいんで、この時ばかりは面倒なことも黙ってうける。

「さーて。全員いるな?じゃあ、今から宿に向かう。各自荷物を忘れるなよっ!」

「「「はい!!」「」」

先生に向ける敬礼もこのときはちゃんとする。だってなんか先頭にさせられたんだもん。いつもならサボるけどさすがに今回ばかりはそうもいかない。……ヴェルの恨みか?いつもヴェルが先頭だよな?

そんなこんなで宿。

「あー……やっと着いた……」

「これからの予定って何だっけ？」

「あ？全員で城に行くんだろ？明日からは魔法の訓練だし」

あれ？うん？僕、部屋間違えたかな？僕はふと手に握られている部屋の番号が書いてある鍵を見つめて首をかしげた。

ミスタリアから城方面に100mくらい進んだところにあるこの宿屋は日本の世界のホテルには劣るけどここもレンガ造りでなかなか綺麗だ。

中に入ると豪華な装飾品が並んでいて、そこにいるだけでなんだか背筋が伸びた。赤い絨毯にシャンデリア。なんかシンデレラの舞踏会場みたいなフロントから2Fに上ると僕らの泊まる部屋があるわけだけど……

なんでティトヴェルトリヨウがいるの？

「……ねえ？」

「なんだ？」 「なに？」

「なんで僕の部屋の前にいるの？」

「「部屋が一緒だから」」

「……」

僕は一人肩を落とし、首を振った。そんな僕の気持ちを知ってか知らずかは知らないけどヴェルが僕の肩に腕をまわしてきて少し乱暴に叩いた。

「まあまあ良いじゃねえか！！せっかく帝都まで来たんだしよ」

「そーだよ！！楽しまなきゃ損でしょ？」

ティトまでそんなことを言っ……でも。

「そう……かもね」

確かにこいつらというけど疲れるけど……でも楽しいし。まあ、いっか。

僕は鍵を部屋にさしこむ。ガチャと言う音と共に部屋は開いてヴェルとティトはまるで子供のように素早く駆けこんだ。僕はそんな二人の背中にふと微笑んで部屋に入ろうと……した。

けど、それはリヨウによって止められた。リヨウが僕の肩に手を置いて僕が部屋に入るのを押さえていた。

振り返って僕はリヨウに向き直ると口を開いた。

「なに？リヨウ」

「……リナちゃん。気をつけてね、タクミ。王家に目をつけられたってことは……」

「……面倒なことに巻き込まれるってこと？……ありがとう。気をつける」

リヨウの忠告を聞いて僕は少しだけ気合を入れた。
確かに王家と関係を持ってしまった以上、狙われる可能性は高くなる。気をつけないと……

でも、何でリヨウがそんなこと言ってくるんだ？

僕はかすかな疑問を抱きながら部屋に入り荷物の整理を始めた。
……さて、これからお城ですか……どうなる事やら。

旅行気分 【TAKUMI】（後書き）

ぎゃー！！

1回データが全消しされました……！なぜだ！！

めっちゃショックで……最初書いていた時よりも話が変わりました。
あ、でも城に行く設定は変わってません！！

これから更新がかなり遅くなるかと思っています！！

……中総体が近いので（泣

嫌な予感 【RINA】 (前書き)

久しぶりすぎる更新……

さて、今日はお城に向かいますよ^^

嫌な予感 【RINA】

うーん……昨日はよく寝たあ……

わたしは背伸びをしながら学校の人々と一緒にお城に向かってます。

タクミ君たちは部屋が一緒だったらしいけど、わたしとティナは離されちゃって……不安だったんだけど、新しい友達も出来たからまあ、いっか。

「何かなあ……」

「? どうしたの?」

ヴェルが手を頭の上に置きながらうーんと首をかしげた。珍しい……ヴェルに悩みごと?

わたしが首をかしげるとヴェルはわたしを見降ろして言った。

「昨日の夜さ、なんかよく眠れなかったんだよな。変な夢のせいで……」

「変な夢?」

「……なんかに取りつかれたんじゃないの?」

横からタクミ君が口元だけに笑みを浮かべてそう呟く。それを聞いてヴェルはひきつった笑みを浮かべた。

「やめろって、そーゆー変なこと言うの」

「まあ、どこもおかしくないなら……気にする事じゃないと思うけど」

タクミ君はそう言って前を向いた。ヴェルは少し不満そうに唇を尖らせて「ちえ」と呟く。

そんなヴェルの後ろから聞きなれた声が聞こえた。

「うう……眠いよお……」

「え、ティナも？」

「僕も……ふああ……なんかよく眠れなかったんだ」

ティトとティナは重い足取りで列を乱さないように必死に歩いている。でも、どうして2人も？

「夜更かしでもしたの？お城行くからって興奮するのも分かるけど……」

「ちゃんと寝たよお？でもね、変な夢見たからかなあ……すごく眠いの……」

欠伸をかみしめるティナの横にいるティト「僕も」と言って目をする。

「実は、ティナとおんなじ夢を見てるんだ。なんだか不気味だよね」

わたしはそれを聞いて眉をしかめた。おかしい。どうして2人の人間が同じ夢を見るの？そんなこと、おかしいよね……少なくともわたしはそんなこと経験したことがないから不審に思う。

わたしがあごに手を当てて無言で歩きはじめるとヴェルがティナとティトを振り返ったのが動きで分かった。

「なあ、その夢ってさ、なんか暗い部屋に閉じ込められて変な音が聞こえなかったか？なんか……火が上がる音とか、一気に建物が崩れる音……」

「うん。その夢!!」

ティトが声をあげてから「どうして？」と呟いたのが聞こえる。さすがのタクミ君もわたしを振り返った。

「リナ。おかしくない？」

「うん。すごくおかしい……どうして3人同じ夢を見るの？」

「わからない。……僕たちに関係する事なのかな……」

タクミ君はそこまでいうと考え事をするように腕を組んで歩きだす。

わたしも何か嫌な予感を抱きながらお城へと向かっていた。

お城に到着です。はい。

に、してもお城って大きいなあ……そりゃ街からもすぐわかるくらいだから相当大きいんだろうなってことは分かったんだけど近くとなんていうか……いい、威圧感？

お城はゲームに出てくるような綺麗なお城。白いレンガ造りでまあ全体的に白くてファンタジー。あと、塔みたいの高いところがいくつかあって屋根が三角錐の形をしている。色は水色。

そしてわたしたちはその大きなお城の前の大きな庭にいます。はい。ひじょーに綺麗な芝生と噴水と花が植えられています。

……今思う。

どうして一般人が入れる！？

わたしの思いなんて知るよしもない先生が大きな声を張り上げる。

「さて……ここからは王宮だ。学園の代表としての品格をもって行動するように」

「「「はい!!」「」」

先生の言葉には「面倒なことは起こさないでくれ」っていう気持ちが入められていた。なぜわかったかって言うと、読心術。

確かに王宮で問題を起こしたなんて事になったらここまで先輩の方が作り上げてきた学校の歴史に泥を塗るようになってしまったらもうめんどくさい……

『世界で唯一の魔法騎士学校』。タクミ君のいつかの言葉がよみがえってくる。その学校の代表でどういう事！？今考えると恐ろしい事だと思う……

「さて……12時までには自由行動にする。騎士団のいるところは一般人が入ってはいけない場所だ。絶対に行くなよ……って言ってるのに行く奴は何人も見た。だから一番心配な……」

やっぱ。嫌な予感が――

「ヴェル、ティナ、ティト!! お前たちはミーナ先生と一緒に行動しろ」

「はあ!? 俺たち小学生じゃないっすよ!? なんで先生と……」

洩るヴェルに先生がため息を漏らす。

「いいから。じゃあどうするんだ? 騎士団に捕まって学園追放になったら……」

「そ、それは……」

さすがにヴェルも折れたらしい。肩をがっくりと落として小さく頷いた。

「オネガイシマス」

「わたしは楽しければそれでいいなあ?」

「ていうか、どうして僕まで先生と行動しなくもY「ティト一緒にいいもん」……」

ティナの言葉にすっかり諦めたティト。たぶん、ティトと一緒にしないとティナが嫌がるからそうしたんだろうな……

「じゃあ、その他の者はしっかり見学してくるように。時間になったら念話で集合場所を教える。それまで王宮を回ってくれ」

先生はそう言うヴェルたちをミーナさんに預けた。そして生徒

たちが一斉に歩き出す。

そこに立ち止まっていたのはわたしとタクミ君とリョウだけ。

でも、リョウとタクミ君はなにかを話している。別に男子の話に興味があるわけじゃないけど、離れているのに会話の所々が耳に入る。

「……だから、一緒……」

「……ま、いい……」

「何話してんの？」

わたしがひよこつと顔を出すと2人は驚いたように目を見開いた。けれど、リョウはすぐにいつもの微笑みに戻る。タクミ君もいつも通りの……無表情。

「一緒に行動にしようよ、って誘ってたんだ。リナはもちろんOKだよね？」

「うん。わたしは全然いいよ！！一人で行くの嫌だったし……」

「……じゃ、早く行こう。時間がもったいない」

タクミ君の言葉に頷き、わたしたちはお城の中へと足を進めた。

嫌な予感は尽きないけどね……

嫌な予感 【RINA】 (後書き)

さあー次はお城の中だ〜……

がんばります。お楽しみに〜

天然王子 【TAKUMI】 (前書き)

お久しぶりです！

なんだか書いてみた…… (おい待てや)

どうぞ！

天然王子 【TAKUMI】

なんだかんだいいながら、僕は珍しいメンツと一緒に行動しています。

……まあ、ヴェルたちが先生たちと一緒にだつてことは目に見えていたけどね。どうしてあの3人を連れてきたんだか……

「お城って……すごく広いねえ」

ヨーロッパの町みたい、トリナが呟くのが聞こえる。うん、確かにそうだ。なんか、テレビで見たことあるような……王宮？ みたいな。

「まあ、この世界で一番大きな街だからね。これくらいは普通だよ」

「ふーん……」

気の抜けた声で説明をするリョウは展示物の剣に目を輝かせている。……あれは、レイピア？ あんなの、なんか価値あるのかな……。武器がまだ杖である僕は剣には興味はない。ましてや、人を、命を傷つけるのはごめんだ。罪悪感が……。ああ、考えただけでも気持ち悪い……

僕は肉を断ち切る感覚を想像して、ぞわぞわした右手をこすった。うう……。想像しなきゃよかった……

「大丈夫？ タクミ君、どうしたの？」

「ん。別に……。なんでもない。……。リョウ。行くぞ」

「んあ？ ……もうちょい見たかったのに……」

「ちえ」と唇を尖らせてリヨウは渋々僕たちの後に付いてくる。リヨウが見ていたモノの他にもたくさん展示物が飾られている。どれを見てもキラキラと輝いていてなんだか『俺たちはすごいんだぜ！』ってゆーのを主張しているバカにしか思えない。

たぶん、あの王子の指示じゃないと思うけど。あの王子は天然だ。うん、絶対。

そう思った直後。

「ああ、いらっしゃっていたのですか？」

あの爽やかな声が頭上に降ってきた。

……え？ いやいやいや！！ ちょっと待て。ちょっと待てっ！！
何で一般開放の城に王子本人がいるんだ！？

「いらっしゃいませ、我が城に」

天然王子は優雅に会釈をして見せた。僕たちも一応学校で教わった騎士のあいさつをする。

「はじめまして。魔法騎士学校から参りました、リヨウと申します。以後、お見知りおきを」

「ご丁寧に。はじめまして。僕はクレイド・ミスカ・スフィアリクです。一応、この帝都の王子として、この街を守っております」

えっと……天然王子……じゃなかった。クレイド王子に初めて会

ったりヨウはなんだか嬉しそうだ。

……でもなんだが嫌な感じがする……

「そしてリナさん、タクミさんですよ」

「はい」

僕たちは二人同時に返事を返す。

視線を向けられるだけでなぜか背筋が伸びた。きっとこれが威厳？
とかつてやつた。年は僕とそんなに変わんないはずなのに……
すごいなあ。ある意味感心する。

「えっと……なぜ、わたしたちの名前を？」

リナが素朴な疑問を投げかける。僕もそうだと思っていたけど、
たぶん、先生の手配がすでに回っていたのだろう。

魔法を使える王子だ。きっと何かしらやって僕らの名前を調べた
んだろう。

……面倒ごころーさんです。

「それにしても……ほんと、お綺麗ですね」

クレイド王子はリナに優しげな視線を送り、微笑んだ。そりゃー
ミリヨクテキな笑顔で。

……僕にそっちの気はないよ！？

「そ、そんなことはありません！ わたしなんか、全然……」

そう言って両手を振るリナを尻目にリヨウがすすす、と僕の隣に
やってきた。

「……ねね。リナちゃんやっぱ噂どーり気に入られてるんだね。なんでかな」

「僕が知るわけないじゃん……」

「まあ、確かに可愛いけど他にも可愛い女の子いっぱいいるのにね」

「……何が言いたいんだ？」

「いや、別に♪」

その♪は何だ！？

僕はそう叫びたいのを何とか抑えた。いや、叫ぶのは僕の柄じゃないし、王子の前でそれはダメだよ。

「そうだ、みなさん、僕が城内を案内しますよ。どうでしょう？」

「ええ、ぜひ」

「お願いします」

僕だけは返事をしないでいるとクレイド王子がそれに気が付いて心配そうな視線を向けてくる……なんで？

「タクミさん、どこか具合でも悪いのですか？ もしそうでしたらすぐに医者を……」

「いえ、大丈夫です。ただタイミングが合わなくて」

「あ、そうでしたか。ならいいんです」

そういつてその爽やかフェイスに幼い笑みを浮かべる。

……ああ、僕の読みは間違ってたなかつた。きつとクレイド王子は天然だ。いや、むしろバカ……いや、何でもない。

とりあえず面倒なこと間違いなしなんで……僕は逃げたい。

まあ、僕たちが変な気でも起こさない限り……大丈夫だよね。
嫌な予感がぬぐえないのは本当に面倒なんだけど……

天然王子 **【TAKUMI】** **（後書き）**

かなり久しぶりの更新です！

それなのに読んでくださる方がいた……嬉しいです。
本当にありがとうございます！

これからも温かい目でも応援してください。

そうだった **【RINA】** (前書き)

お久しぶりです。

これからはちよつと文章量増えるかもです><

そうだった 【RINA】

突然現れた王子様にお城の案内をされるわけになったんだけど……
なんでだろう。物凄く嫌な感じがする。そう、これは確か――

「……どうしたの？」

不意に耳元でささやかないでください。物凄く心臓に悪いです。
声の主はもちろんタクミくん。
私は振り返って首を横に振った。

「なんでもない。ちょっと考え事」

「……………」

私の嘘を信じてくれたのかな？ タクミくんは「そう」と言っ
て少し歩みを速めた。

そういえばタクミくんは思考魔術を使えないから相手の考えを知
ることが出来ないんだって言ってた。

だからなのかな。

まあ、私も元の世界だったら思考魔術なんて使えないんだけど……
実際あんまり使い道ないんだよねー思考魔術。

もし……もし戦闘とかに出くわしてしまったら使えるのかもしれ
ないけど……出来ればそんなことは避けたい。てか戦闘なんて絶対
に無理――！

私は先の見えない明日に向かって少しだけ絶望を覚えて溜息をつ
いた。

「こちらが代々伝わる秘宝の剣です。この剣があれば次の代の国王の引継ぎが出来ない」

ひととき豪華な部屋へ通されて私は背が伸びるような感覚がした。うう……何この部屋。物凄く落ち着かない。キラキラしすぎ!! 壁は真っ白だから窓から入る光が反射して輝いて見えた。

それにカーテンやらカーペットやらショーケースやら台やら……宝石がちりばめられているのか色とりどりに輝きを放っている。しかも極彩色。きつと、あの部屋の端にある小さいショーケースの中に入っている腕輪だけでも相当な値段のはず。……いやー!! 早くここから出たい!! てか出して!! 何かしでかして壊したりしたら学校を追放されると思う……

「へえ……すごいなあ」

手で顎を撫でながら感心したように剣へ熱烈な視線を送っているリヨウ。

……どれだけ剣が好きなんだ君は!!

そんな突っ込みを心の中でする。

もしかしたらリヨウはむちゃくちゃ強いかもしれない。学年が上とか、稀にみる出来のいい学生は武器として剣を扱うことが出来るんだ、ってミーナ先生が教えてくれた。

だからまだ私たちは杖が武器。今はお城の中と言うこともあって武器の保持は許されていない。ホテルから出てくるときに全部置いてきちゃった。

長いマントを翻してクレイド王子が振り返った。その顔にはあどけない少年の笑顔が張り付いている。

うう……私より年上だろうけど……かわいいなあ……

「ここが最後です。いかがでしたか？　わが城は」

「いやあ、お城なんて初めてだったのでどう表現したらいいものか……」

リヨウが苦笑いを浮かべてそう言った。

確かにそうだよ。私もうまい言葉を並べたいけれど言葉が全く見つからないや。

なんていうか……『きれいでした』とか『すごかったです』とかって言う小学生的な内容しか思い浮かばない。だってほんとにそうなんだもん。

テレビポーターみたいな言葉は流石に言えない。

「まあ、そうかもしれませんね。僕はここがあまり好きではありません」

「「はあ？」」

タクミくんとリヨウの声が重なって結構な大きさになった。

二人は少し慌てて目をそらしたりしていたけど、王子は全く気にしていないみたい。

むしろ「なんで目を反らすの？」って顔してる。

……なんつー天然！！

「僕は、あまり煌びやかなものが好きではないのです。もっと落ち着いていて、それでいて美しいものが一番だと思います。そう、リナさんのように」

「ちょっと待ってください。私は一体それをどう受け止めればいいのですか!？」

思わず抗議の言葉を口にする。

さらっとした口調でそんなセリフを言われても私が困る!! しかもこの爽やかフェイスで!!

王子は私の言葉に首を傾げて頭の上に?を浮かべた。

それを見たタクミくんが小さな溜息をつく。そして顔を追う時からそむけて声は出さずに『天然王子』と口を動かして言った。

そんなタクミくんを見て思わず苦笑いをしてしまう。わかるけど行動に出さないでよ、タクミくん……

そんなタクミくんを見てリョウがニヤニヤし始めた。

……なんだろう、あの笑み!? 物凄く気になるんですけど!?

リョウはニヤニヤした顔を崩さないまま剣にくるりと背を向け王子に向き直った。

「さーそろそろ先生から連絡来るんじゃないか? ——では王子、またの機会に」

「はい。それではまた。お気をつけて」

優雅な魔法騎士の礼をしてリョウはいち早く部屋から出て行ってしまった。私たちも王子に礼をし、慌てて後を追う。

「……またって言うか……今日の訓練、城（こゝろ）でするんだっての……」

久しぶりに嫌そうなタクミくんの言葉を聞いてまた私は苦笑いを返した。

「でも、王子が来るとは限らないでしょ? ……まあ、あの人が抜

けてるのは私も認めるけど」

「抜けてるどころの話じゃない」

ズバツと言いつつタクミくん。

うわーヴェル並みに言いきったよ。ある意味すがすがしいよ。

そんな事を思いながら歩いていると急にタクミくんが真剣な顔をして立ち止り、私を振り返った。

「……今日の訓練は、めんどくさいから嫌だ。城でやるんだ。本物の魔法騎士も来るにきまつてる。それに――」

「それに？」

「僕たちの正体がばれるかもしれない」

タクミくんの言葉で私は思わず息を呑んだ。

そうだった。すっかり忘れていた。

私たちは一般人である前に異世界人なんだった。

そして――混乱を引き起こす原因なんだってことも。

私たちが来たのは、この世界に危機が訪れるからだって聞いた。

その危機がとてもすごいものなのか、それとも小さなものなのか……

何もわからないまま私たちは帝都（こてい）に連れてこられた。

でも、私たちが異世界人ってことは見た目では分からないはず……

……！！　　そうだよ、だって見た目は全然周りの人たちと変わらない

もん！！　　髪だって茶髪だし！！　　もちろん地毛だけど！！

私たちが「異世界人です☆」って公言しない限りはきつとばれな

いと思う。きつと！　　たぶん……

どうしよう、何だか不安になってきた……

私は目を泳がせながらうつむいた。

そんな私にタクミくんが近づいてきて、ぽん、と肩に手を置く。

「大丈夫……とは言いきれないけど……派手なことをしなければたぶんばれない。僕たちの魔力はほかの人より強いらしい。だから、大きな魔術は使わないようにしよう。そうすれば、大丈夫」

「うん……そうだね。弱気になっちゃだめだ!!」

思い切って笑顔を作るとタクミくんも笑ってくれた。

……笑顔とまでは言えないけど。

「おい!! 早く行こうよ!!」

タクミくんの肩越しに大きく手を振るリョウが見えた。

それにこたえようと息を吸う。でも、声を出す前に念話が届いてきた。

『生徒に告ぐ。直ちに中央広場に集合!!』

……中央広場ってどこですか？ 朝、最初に入った庭？
思わず首をかしげるとタクミくんが

「……ここに来るときに通ったでかい公園みたいなところ

と教えてくれる。

確かにそんなところ通ったような……

私は記憶を探りながら頷いた。

訓練……今日は一体何をするんだろう。

よくわからないけど……少し楽しみかもしれない！
まだあるんだけどね。
あ、不安は

そうだった **【RINA】** (後書き)

更新を開けてしまい、申し訳ありませんでした＞＜；

これからは不定期ながら少しずつ更新して行こうと思いますので、
よろしくお願いいたします！！

まさか 【TAKUMI】

先生から指示された場所にはもうすでにたくさんの生徒が集まっていた。

その中には何人か話した奴もいる。まあ、名前も知らないんだけどね……

僕はごちゃごちゃガヤガヤとうるさい人ごみから避けるべく、薔薇のアーチの外側へと逃げる。逃げた僕を追って、リナとリヨウがやってきた。

「ティナ達、見つからないね……」

どこかさびしげな声色でリナはしゅんとなった。そんな彼女の肩をリヨウが軽くたたく。

「まあ、先生と一緒にいるんだし、大丈夫でしょ。整列もするだろうし、すぐに見つかるよ」

「そうだよな。うん……」

女子^{ティナ}がいなかったからかやっぱり少し元気がない。リナはティナに少しぞっこんしてるところがあるからなあ……

僕は心の中でため息をついて視線を人込みに移した。

その中からどこことなく探すのは金髪と薄紫。

よく探せば――

「……いた」

「え？」

僕の声に素早く反応したリナは僕の視線の先を見つめる。

僕は指をさしながらリナに言った。

「ほら、あのピンクの髪の子の後ろ――」

「あ、ティナ!!」

リナの高い声が響いて生徒の何人かが僕たちのほうを振り向く。
いやー。だからなんでもないってば。こっち見ないでよ。

少し一瞥してから僕はふいっと生徒たちから目をそむけた。その視線の端っこにリナが元気に手を振る姿が映る。こういうとき、やっぱり女の子はすごいと思う。

リナの声に気がついたのかティナ達の駆ける足音が聞こえてきた。

「リナあ! よかったあ、探したんだよう!」

「わたしもだよ!! 会いたかったよう!!」

こんなとき、女の子はすごいと思う。女の子同士ってすぐに抱きついたりするじゃん。……僕には理解できない……

「お? どーしたよタクミ。俺がいなくて寂しかったのか?」

「うるさい、死ね」

「ええ!? おいおいひでえなあ」

そう言っ僕の肩に絡みついてくるヴェル。さっきも言ったけど僕には理解できない行為なので。

「~~~~~」

ヴェルの腹に肘鉄を入れてやった。泡くらったように目を見張り、声も出さずにうずくまるヴェル。

自業自得だよ。

僕たちの行動を冷静に見ていたティトが呆れたように肩をすくめた。

「全く。何やってんのさ二人とも！ 今から喧嘩なんかしてどうするの？」

「喧嘩じゃない。ヴェルに世間の厳しさを教えてやったんだよ」

「い、意味わかんねえ……」

まだ腹が痛いのか、ヴェルはうずくまったまま足元から僕を睨みつけてくる。その目に若干涙がたまっているのを見て、ちよつと強すぎたかな？ なんて心配してみた。まあ、このくらいでくたばる奴じゃないのはわかるけど。

僕らの会話を聞いてさらにため息をついたティトは次にティナに目をやった。

ティナもティトの視線に気が付き、にこりと笑う。

「もういい加減離れなよ二人とも！ ほら、みんな見てるよ？」
「うー……」

リナが同じ背丈^{ティト}の少年を軽く睨むふりをする。それでもティトは「駄目なのは駄目」と言って引かない。

しばらくそんなにらみ合いが続き、リナが根負けした。

「わかったよ……」

仕方ない、といった様子でリナがティナから離れる。

ティナは「えへへ」なんてはにかんで笑って見せた。

……んと……な、なにこれ。三角関係？ いやいや……そんなはずがない。

僕は軽く頭を振って空を仰いだ。

どこまでも青い空は僕たちがいた世界と何ら変わりはない。
ただ、何かが違う。その何かがわからない。

「全員集まったか？ それでは、本日の授業に入る。全員、私について来い！」

僕の思考は先生の掛け声によってかき消された。まあ、別に深く考えてたわけじゃないから別にいいんだけど……

僕は先生に付いてぞろぞろと歩きだした。

「さてさて……これから何すんだろかな？」

「たぶん、ここ闘技場でしょ？ 何か見るんじゃないの？」

ヴェルとティトが周りを見渡しながら顔を合わせあう。僕もティトの意見に賛成だ。

どっからどーみてもここは何かのゲームに出てくるような闘技場だ。

大きく円をかたどり、周りは観客席が所狭しと置いてある。僕らが入ってきた扉から見て右端と左端の壁には鉄格子があり、その向こうにとても強い何かの気配を感じる。

……ん。おかしいな……僕たちって観客だよな？ あれ……

「では、名を呼ばれた者はここに残れ！！ ——まあ、全員呼ばれることになるが……」

「え」

——いやな予感っていうものは的中するらしい。

「どういうこと？ え、私たち何かさせられるの？」

リナがわからないというように首をかしげて先生を見つめる。

先生の手元には恐らく僕らの名前が書かれた名簿が握られていた。

「じゃあ呼ぶぞー」

先生の声が妙に闘技場に響いた。

これは……【RINA】

隣でタクミくんがわざとらしいため息をつく。先生に呼ばれていないのに、なんでそんなに憂鬱そうなんだろう？

「ねえタクミくん。なんでそんなに憂鬱そうな顔してるの？」

「……なにも読心術使えばいいのに」

「なんでもかんでも使うようなことはしないの！」

闘技場の入り口から西側の観客席に座らされた――でも席は自由だったので五人で並んで座った――ただけど、その席でタクミくんは自分の膝に肘をつけて頬杖をすると、まっすぐ闘技場に残った生徒六人を見やる。

「今から何をするか、リナにもわかるでしょ？　そのあと僕たちが同じことをやるはめになることも」

「今からすること……？」

わたしはそこまで頭が回っていなかったからタクミくんの言葉に思わず首をかしげてしまった。そして、タクミくんと同じように闘技場の中に視線を送る。

わたしの左隣に座るティナがわくわくした様子でティトに話しかけているのが聞こえる。でも会話までは頭に入ってこなかった。

理由は簡単。

「これ……ほぼ実戦じゃん！？」

思わず声をあげた。自分でもびっくりするくらいの大声だったから、周りにいる人たちが一斉に振り返る。気まずくなって自分の膝

を見つめたけれど、今、みんなが冷静に見れていることが正直驚き。やっと、タクミくんが憂鬱そうにしていた理由がわかった。今、目の前で生徒たちがやっているのは実戦といっても過言ではない。三人でチームを作り、それぞれが自分の特性を生かして相手のチームを攻撃している。

剣、魔法、モンク、弓矢……バラバラに見えるけれど、よく見てみるとよく考えられているチーム編成だ。至近距離で戦う人を後方から援護し、詠唱している人を守り、その間に魔法を放つ。どちらのチームも完璧。

ルールはどうやら相手が降参するか、心臓の位置に付けられた『魔法石』を割れば勝ちみたい。

魔法石って確か体に触れさせていると体力と身体能力を高めるんだっけ……

それなら攻撃の威力は半減されるはず。

剣と剣がぶつかり合って鋭い金属音が鳴った。

「ねえリナ。わたしたちも同じことするのかなあ？ わたし、こんなことできないよう……」

ティナが不安そうにわたしの顔を覗き込んでくる。わたしたちはまだ実戦を経験したことはないし、ましてやわたしなんて入学して期間が短い。

ティナは魔法が苦手でいつも変な所に飛ばしてしまう癖もあるから余計に不安なのかもしれない。

するとティトまでもが眉尻を下げてわたしを見つめてきた。

「実戦的な練習だって片手に余るほどしかやってきてないし……下手したら怪我するよね」「うーん……どう、なんだろう」

またらず対応に困ってタクミくんを見やるけれど、タクミくんは

何か考え事をしているようで全く気付いてくれない。

うう……どうしよう、この双子の瞳にいったいどう対応すれば……

「そんなこと簡単だよ」

急に後ろから声がした。難しいことなど何もない、という声音だった。

声の主に覚えがあって振り返えずに尋ねてみる。

「どうすればいいの？ リョウ」

「リョウは何とかできるの？」

ティナが振り返って首をかしげる。

わたしも振り返り彼の姿を見ると、彼は堂々と私たちの列の後ろに立ち、その後ろの生徒から睨まれていた。

「お前は馬鹿か」

タクミくんは振り返って立ち上がると無理やりしゃがませて私たちと目線を同じにさせた。

少し唇をとがらせながら「ちえ」といったリョウは長く青い髪を風になびかせながらティナとティトにペンダントを手渡した。

デザインはシンプルなもので楕円形の真っ赤な石が鎖でつながれているもの。

「これは何？」

怪しいものを見るように受け取ったペンダントにはめられた石を見るティトにリヨウは笑いながら胡坐をかいた。

……そこ座るところじゃないでしょう。

「怪しい物じゃないよ。魔法の力を制御する石さ。ティナは魔法の制御が苦手だろ？　そしてティトは魔法の威力が小さすぎる。これなら力が均等になって制御しやすくなるんだよ」

「へえ……すごい石なんだねえ！　でもこんな石見たことないよ？」

ティナが目を輝かせながらきらきらと光る濃い赤色の石を食い入るように見つめながら尋ねる。

リヨウはまた笑いながら今度は唇に人差し指をあてる。

「手に入れるの大変だったんだからね♪　そこは秘密だよ」
「えー！！」

ティナ納得いかない、とでもいうかのように唇を尖らせた。
それにしてもこの石……すっごく深い色をしている。なんか……
『血』みたいだな……

するとわたしの肩越しにタクミくんとヴェルがそのペンダントを覗き込んでいるのがわかった。

「おお！！　なんだよ、そんなすげえもんがあるんだな……なあリヨウ、もうひとつないのか？」

「んゝあるよー。いる？」

「いる！　くれっ！」

ヴェルはリヨウから差し出されたペンダントを半ば奪い取るように受け取り、あっという間に首に下げる。

「特に何も感じないけどなあ。ほんとに大丈夫なのか？」

「だいじょぶだいじょぶー」

へらへらと楽しそうに笑うリョウに「ならいつか」とヴェルも笑った。

この時わたしは気付かなかった。タクミくんが鋭い目でこの石を見ていたことに。

これは……
【RINA】（後書き）

お久しぶりです!!
またまたよろしく願いします><

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0343k/>

異世界は赤い糸!?

2011年11月15日12時28分発行